

## 一八〇一年夏のヘーゲル

## ——『イエーナ時代の論理学』研究(二)——

酒井 修

## 一 「資格試験」問題の概観

一——一八〇一年八月十三日(木曜日)<sup>(1)</sup>、ヘーゲルはイエーナ大学の哲学部に、一通の書状を(所定の通りラテン語で認めて)提出した。——愚生は令名いや高き貴大学において (in illustri hac Academia) 理論哲学および実践哲学を講じたたく存するものであります。つきましては、開講の御許可と、また愚生が既に他の地で得ております学位についての御認定とを、貴大学から是非とも頂戴致したく、さやうにお取計らひ下さいますことを、その権能<sup>ちから</sup>をお持ちの皆様がたに、斯くは切にお願ひ申し上げる次第でございます。——すなはち、いま、このテュービンゲン大学哲学博士<sup>マギステル</sup>が、イエーナ来住半歳餘にして、やつと正式に願ひ出てゐるのは、所謂教授資格試験 (Habilitation) の受験にほかならなかつたのである。

しかし、出願それ自体は素志を実現するための未だ第一歩でしかないであらう。それは、傍目<sup>はため</sup>には勿論、彼自身にも明らかな筈であつた。にも拘らず、彼はこの書状に、或る甚だ虫のいい願望を、いな、寧ろ全く押付けがましい要求を、既に、一方的に託してゐたのである。——何がどうあつても、開講許可 (venia legendi) は、目前に迫つたこの冬学期からのものがおるのでなければならぬ。のみならず、今日から約半月後の月末<sup>しゆうまつ</sup>には、その冬学期の講義目録<sup>レク</sup>が早くも印刷され始めるが、それには自分の講義題目も亦絶対に掲載されてゐなくてはならない。若し、さうはな

らないで、開講は来年の夏学期からといふことにでもなれば、たとへ当大学の博士名簿 (Matrikelbuch) に自分の氏名が記入されたとしても、このやうに出願したこと自体、全くの無駄骨になつてしまふのだ——そのやうに、そしてそこまで、彼は意気込んでゐたのである。

それにしても、いつたいどんな現実的根拠があつて、そこまでの執心が生じたのであらう。餘す所は僅か二週目、といふのに、この期間内に教授資格請求論文 (以下、資格論文と略記) を書き、印刷し、刊行し、配布し、更に公開討論 (Diskussion) での趣旨擁護までもすべ、て済ませようなどと (しかも課試せられるものはそれらに尽きはしなかつた)、彼は抑々、また何処まで、本気で考へてゐたのであらうか。(一五五頁参照) ——

それはともかく、彼の出願に接した学部長のフォイクト教授 (Johann Heinrich Voigt; 1751~1832) は、即日、回章によつて六名の正教授に判断を求めた。爾後、八月二十七日の公開討論の日までに更に三たび、学部長は回章を發出する仕儀となる。といふのは、考試の細目その他について、ヘーゲルが次々新たな申し出を行ひ、哲学部はその都度それに対し対応を迫られたからである。のみならず、公開討論のその当日 (それは彼三十一歳の誕生日でもあつたが)、実際に討論の対象になつたのは、彼が近く、提出する筈の (つまり、未だ提出されてゐない) 資格論文の一部分でさへもなく、やうやく (講義内容全般に関する) テーゼ二十二ヶ条でしかなかつた。滞つてゐたこの論文がつひに提出され、次いでその翌日、仮講義 (Probeforlesung) も行はれて、考試の一切が終了したのは、哲学部の公式記録によれば、実に十月十九日のことである。——このやうに延延二ヶ月以上もの時日が費されたけれども、しかし結果を仔細に見ると、開講権に関する彼の諸要求は、甚だ身勝手なその姿勢にも拘らず、何と、殆んどが実現してゐたのであつた。

一一二 (1) いつたいどのやうな迂餘曲折を経て、彼の意思はそこまで到達しえたのであらうか。また、彼と哲学部正教授会との間の・数次にわたつた遣り取りの中からは、この時期の彼の・どのやうな人間像が、就中、大学に

おいて開講するといふ事柄への、彼自身のどんな姿勢が、浮び出てくるであらうか。――

(2) しかしながら、いまここでそれらの問ひに立ち入るならば、それは実際には枝葉えだはの事柄にのめりこむことになりはしないか。即ち、一八〇一年夏といふ時点での、彼の私的状況、対社会的關係、更にそれらの根底にある精神的態度などを詳くわらかにすることは、恐らくは、哲学の本来的課題とはなりえないのではないか。それらは、ただ伝記的個人史的研究に、ないしは社会史的時代史的研究に、一任しておけばそれで済むやうな、さういふ副次的な、従つて「好奇心」に帰着する問題なのではないだらうか。――前節(一一)の叙述は必然的に、これら一連の簇出する問ひに、吾々を直面せしめるであらう。

ところがこれらの問ひに対しては、既に吾々には、吾々自身における先行理解によつて、前以て照明が与へられてもゐるのである――前半のほうの問ひ(即ち(1))を問ひ究めることは、当面の研究主題のためには、そのまま、外堀を埋めてゆく手順てしづになるのだ、といふやうに。他方、(2)のやうな、(1)を以て問はずもがな閑事いさまじときへ見做しかねない反省的態度に対しては、吾々は寧ろその無批判的、独断性を指摘して、断乎斥けざるをえないであらう。つまり、イエーナにおけるヘーゲルの講義活動を、その理念的聯関において、純粹に哲学的な学説内容から把握しようとするとき――これが吾々の当面する研究主題であるが――、この意図の実現に対して、(1)の論明は実在的、且つ(なほ消極的であるにせよ)必然的な制約をなす、といふやうに吾々は豫め理解してゐるのである。この企投に基礎を与へるのは、次のやうな事態に他ならない。

いま、数篇のテキストが吾々に与へられており、そして、それらが同じ思想家の同じ時期のものであることが、それらの時間的前後關係にいたるまで、既にほぼ確定してゐる、といふ状況を想定しよう。しかし、ただこれだけの前提しか存しない所へ、ただちに、「それらはすべて根底において、原理も道具立て(使用概念)も論法も同じであり、ひとつの思想的脈絡を多において表現してゐるだけである」といふ豫想までも加へて、解釈に着手しても差支へ

はないであらうか。——勿論、端的に、そして自明的に、否である。さういふ豫断は、実は、それらのテキストの内容がひとつひとつ実証的に吟味され終へてはじめて、結論として、追加しうる定立なのである。同時に多正面から対決を迫られるやうな分裂的狀況は、生身の人間にはいくらでも生起しうるし、従つて、一時に溢出して来た多数文書に對しても、その根底にさういふ体験が潜む可能性については十分に留意すべきだからである。そして彼の資格論文を、それと同時期の諸文書との関聯において理解しようとする場合にも、事態は解釈学的には全く同一なのである。

即ち、キムメル博士の手になる『イエーナ時代の文書年表』が明示してゐるやうに、かの『遊星軌道論』(De Orbibus Planetarum)は、時間的には『差異性』論文に後続し、且つ『エルランゲン文学新聞』掲載の書評と相前後して世に現はれたのであるが、然し、それだからといつて、吾々はこのやうな同時性の故に、これらの文書を無造作に一括し、その集積の中から單純に(つまり無批判に)、「根本概念」を絞り取らうと企ててもよいのであらうか、まるで葡萄を搾つてワインを作らうとでもするかのやうに！「否、それは断じて可能である」と反論するのなら、そのひとは、さうした單絡化を制止する實在的制約がそれらの文書には見出されない、といふことを、何処からのやうにして知り得たのか、それを先づ提示すべきではないだらうか。彼にして若し論点竊取の虚偽に陥るまいとするならば、結局、かの迂餘曲折(即ち(1)の問ひ)のその解明に着手せざるを得なくなるであらう。——

——三 前掲のキムメル博士はまた、ヘーゲルの伝記的研究に資益することを期し、特にイエーナ時代の公的証拠文書(——それは他の時期のものに比べ、未だまったく断片的にしか公刊されてゐなかつた——)をば、周到に且つ丹念に搜し求めた。探索は當にイエーナ大学内の各図書館や資料庫、公文書保管室を尽くしたばかりではない、同博士の眼は旧ザクセン公国の領域を越え、広く兩独各地の国公立図書館、博物館、さらに地方官庁や教会の教区庁にまで注がれた。その成果は一九六七年、『イエーナ期におけるヘーゲルの講師活動資料』といふ標題のもとに公刊されてゐる。そして、爾来この資料は、特に伝記的研究において、多少とも顧慮しなければならなくなつて來てゐる。

のが実情であり（たとへば、アルセーニ・グリーガ<sup>(6)</sup>）、それはその内容上の重要性に鑑みても、至極当然のことであらう。

然し、爾後の伝記的叙述において、この資料が、従来普及の見解を再認ないし増補するための論拠といふ程度にまで、考慮されつつあるのは確かであるにしても、その理解のほうは果して、事態および人物の新しいアスペクトを提示しうるやうな域にまで進み得てゐるだらうか。まして体系的研究においては、この資料を一瞥することの必要性が感知される場所にさへ、ひとは到りえてゐるであらうか。

それ故、本稿がその本来の研究主題（二三九頁参照）のために、まづ第一に意図したのは、このキムメルレ資料の批判的活用であつた。しかしそれは、具体的には、(1) 純粹に、第一次的資料のみからする描出として、つまり素材であり着手点である該資料に、その理解に最少限に必要な他の直接資料をも加へ、ただそれらにのみ基いて、いま問はれてゐる経緯を闡明しようとするやうな、さういふ試みとして、遂行されるべきであらう。（ここで直接資料といふのは、伝記的聯関の中へ編みこまれる以前の、なほ原形を保持してゐる如き資料、たとへばこの教授資格試験についてヘーゲル自身あるひは関係者が何らかの形式と程度において記録してゐる文書類、をば指してゐるのである。）——

しかるに、(2)（第一次資料にのみ基いた・いはば純粹描出の）この企てが、聽て髣髴とさせるところの、事態の委曲、また人物像は、ローゼンクランツ以来伝承のそれらとは、即ち伝記的記述における従来の觀念とは、著しく隔たつてゐる、いな、対蹠的でさへある。そこに現前してゐるのは、「疾うの昔に（恐らくはイエーナ来住前後に既に）出来上つてゐた老大な草稿をば、ただ要約し、これをラテン語に訳出しさへすればよい」といつた餘裕綽綽の天才の、そのシルエットでは決してない。寧ろ、輪廓にまで未だ定まらない渾沌<sup>カオス</sup>、途上にあり可能態にあるが故の青さと強さ、さういふものではないだらうか。たとへば、素志を何としてでも押し通さうとする・軒昂たる彼の霸氣と、（期限がもう迫つてゐるのに）遅々として資格論文を提出しない緩歩ぶりとの間には、餘りにも大きな落差があるが、それは

彼の内面的不均衡アンバランスの、あるひは自己矛盾の、その酷きびしさを物語るものではないであらうか。――

(3) にも拘らず、即ち伝統的理解からは著しく隔たつてゐるけれども、吾々の描像は維持されねばならない。それは、まづ第一に、吾々の現在の立場は、重大な新証アポロギアに接した第二審ないし第三審の判事のそれに譬へられる、といふ意味においてである。たしかに、尊重さるべき判断イウヂカク（下級審の判決）が既に現前してはゐる。しかも、これを無批判に（たとへばその時間的先行性の故に）受け容れて自己の判断となしてはならぬことも亦、明白白である。――更に、第二に、吾々の描出によつてはじめて、資格論文の内容理解に關しても幾筋かの光が新たにさしこみ始めてゐる、といふ意味において、なほ一層さう言へるのである。何故なにゆゑに『遊星軌道論』は、かうも不体裁なまでに不均衡な構成を持つてゐるのか。テーゼの形式で豫め討論されてゐた内容のうち、かなりのものがこれには缺けてゐるが、それはどうしてさうなのか。さういつた問ひへの手掛りを、吾々はここで確かに見出すことが出来る。

しかし最も重要なのは、資格論文の核心的問題が、ずつと先の方までの・またずつと先の方からの聯関において、まは際立つて來てゐる、といふことであらう。即ち、『遊星軌道論』における若干の特殊問題を理解するための・その手掛りといふよりは、寧ろ『遊星軌道論』の全体を哲学的内容のほうから、しかも（論評や講義のやうな）爾餘の諸活動の思想聯関と關係させながら、解釈してゆくための、その道標みちしるべが見出されてゐるといふことである。――この論文の学術の意味は決して、それがティウス・ボーデの法則とそこからの或る推論とを否定した、といふことに尽きるのではない、従つて、この年の一月一日に小遊星ケレスが火星と木星とのあひだに発見されて以降、この論文の中心は發表される以前に既に、悉く、無に帰してゐた、といふやうに理解すべきではない。<sup>(10)</sup> 寧ろ、吾々は、この論文の意圖を、彼が言ふ所に従つて素直に理解すべきである。即ち、(1) 哲学そのものを復興し、(2) 物理学フィジクスを（ニュートンの）力学ダイナミクスから引離して、この（復興された）哲学のもとに取戻し、(3) かくして哲学に、同一性の原理を、それも差異を内に定立するやうな同一性の原理（*principium identitatis, quod in se ipso differentium ponat.*）として、確保せしめる<sup>(11)</sup>

—これが資格論文の基本的構想なのであり、この論文の学術的意味もそれに従つて判断されるべきなのである。そして、さういふ解釈に必然的に向はしめる道標に、吾々はここでは、からずも、遭遇する。しかし、それ故にこそ、吾々の描像が、もはや資格論文だけではなく、(求心的構築も外向的論評もすべて、含めた・)イエーナにおける彼の思想活動全体を、その理念的聯関において展示する端緒となりうることも亦明瞭であらう。

堅持すべきこの描像を、吾々は次節以下で、その発端からの生成において再現して見よう。

## 二 各当事者の立場

二一 実は、ヘーゲルが受験を願ひ出るより六日前に、哲学部正教授会は、資格試験(ヘーゲル試験)に関する改正学則の厳守かたを、改めて申し合せてゐたのである。そしてそれは、例規一般の解釈を厳正に遂行することによつて、学部運営にいつそうの秩序を齎し、以て教授団の權威を高めようといふ・哲学部の姿勢の一端を表現するものにはかならなかつた。しかし、さういふ意志は何処から生れて来たのか。—イエーナ大学がその当時置かれてゐた状況を、更には時代の背景といふものを、歴史的記述をば二、三顧みながら、一瞥してみよう。

—十八世紀最後の十年、「啓蒙」は愈々遠くなりつつあつた。既に『純粹理性批判』の登場によつて、啓蒙期哲学は三世代九十年にわたるその命数を終へてゐた。(マックス・ヴント)<sup>(13)</sup>しかし、文学的創作、社会的風潮、更に現実政治といふやうな文脈での・生の諸聯関においては、無常の到来はいつそう迅速であつた。即ち、啓蒙から生れながら啓蒙を弑逆した鬼子どもにも亦、裁きと滅びの日が早くも訪れつつあつたのである。理性・寛容・人間愛(フョーデル)・世界市民性、そして自由、といつた理念には、激情あるひは古典性・自己主張および權威否定・革命と祖国愛、のやうな諸原理が取つて代つたけれども、それらも亦、自分の背後から自分自身によつて突刺されねばならなかつた。さういふイロニーは、特に政治的現実の中で、革命から恐怖政治への転換として、あるひは啓蒙君主の・専制君主への豹変とし

て、万人誰しもが見届け得るものになりつつあつた。

ザクセン・ワイマール公カール・アウグスト (Carl August: 1757~1828) は、もともと自由主義的な心術のひとであり、「精神の完全な自由を所有してゐてこそ、大学は繁栄し得るのだ」といふ信念においては終生一貫してゐた。はるか後、カールスバート会議 (一八一九年) のときでさへ、ただひとり、メッテルニヒに楯突いて大学の自由のために弁明したほどにも。従つて、九十年代の初期、フィヒテや G・フーフェラント<sup>(14)</sup> たちが、フランス大革命に発する自由の理念に、著述や講義の中で公然と賛意を表明したときも、また神学部の中に、啓蒙の立場に立つて正統派神学や教会の権威に対し批判する動きが現はれ、フィヒテがそれに一枚加はつた折も、更にこの人が神学者パウルスとも、学生結社への反対組織たる「自由人同盟 (Bund der freien Manner)」と結んで自由を實踐した場合も——いづれも、彼は反対勢力に動かされないでゐた。しかしかうした「ジャコバン主義者」のそのひとりが、いかに純学術的な信念からせよ、「無神論」を頑強に主張するに及んでは、大学の維持者たるザクセン・ワイマール公に残された道は、最早ひとつしかなかつた。(一七九八年)——フランス大革命は、中部ドイツのこの名門大学の中に、このやうな波紋を、即ち教授団内部の、また理事者と教授団とのあひだの、最後に各自の内面の、思想的政治的な対立・葛藤・動揺をば、惹き起しつつあつたのである。しかも、そればかりではなかつた。

イエーナ大学はまた、ドイツの学生運動史のうへに不朽の名をとどめてゐる。対仏解放戦役から復学したこの学生たちは、一八一五年六月、はじめて全学的な学生組合を結成し、それが全ドイツの大学に波及して、一八一七年十月のヴァルトブルク祭における全国学生組合の結成にまで発展する。しかし、元来は郷国別の学生結社 (Studentenorden) が (祖国愛といふ) 理念に基いた精神的組織にまでそのやうに変容してゆく運動を、逆に、イエーナ大学における抑々の原点にまで溯つてゆくと、そこには、フランス大革命に触発された数々の学生騒擾 (就中、一七九二年の紛争) が見出され、そして、そこからの波動が次の世紀にまで引き継がれてゐることが知られるのである。<sup>(16)</sup>



—のみならず、大学の外からも亦、いろいろな聲音があるひは近づき、あるひは既に通り過ぎつつあつた。大学における精神的生のその変革に直面して、教授陣や制度面を充実しようとする努力が、この頃から漸く各国で顕著になつてくる。バイエルンでもバーデンでも大学の諸制度の再編成ないし新組織が着手される。特に、プロイセンはザクセンを上回る待遇によつて学者の招聘に乗り出した。にも拘らず、ザクセン—ワイマール公には十分な資力が無い。これらが重なつて、特に一八〇三年から四年にかけ、イエーナから大量の頭脳が流出するのである。

しかし気にかかるのは、同僚の去就や動静だけではない。この大学町に、「理性の世紀」が終りゆく頃から一氣に燃え上つた観念論哲学および浪漫主義文学の運動は、群れ集ふ数多の天才によつて創造された・精神的世界の靈的出来事であつたけれども、それは、「象牙の塔」で樸学を講ずる者にとつては、寧ろ「文士たちのお祭り騒ぎ」(Der literarische Sauss)ではなかつたであらうか。文士らの向う意気の強さや私生活も、狭い大学町では、目障り耳障りではなかつたであらうか。いな、それどころか、彼らが大学の講壇に関与するとき、屢々災厄が齎らされたのである。

(後述一五八—九頁)

—要するに、大学も大学人も、十年このかた、外からの、また内からの激しい衝迫によつて動かされ掻き立てられ、そして自分でも活潑に動いてゐたのである。さういふ不安定且つ不透明な状況を念頭においてこそ、正教授会がいかなる意図のもとに学則を勵行しようとしてゐたのか、更に、この申し合せから僅か六日しか経つてゐない時点なのに、何故に、学部長の第一次回章に対し正教授の半数が、学則通り公開討論を実施するやうわざわざ念を押してゐるのか、が理解され得よう。ヘーゲルの申請に対し、正教授会の判断は、好意的・実務的・消極的と三分したけれども、「学則遵守」はそれらすべてに共通してゐたのであつた。——しかし、資格試験において厳守されることがそれほどまでにも望ましかつた学則とは、このとき、いつたいどのやうな内容のものであつたのか。

二二二 イエーナ大学哲学部のその当時の規約では、開講許可の申請(つまり資格試験実施の願ひ出)が出来るの

は、学位取得者 (Promotus)、即ち博士<sup>ドクトル</sup>または修士<sup>マギステル</sup>の称号 (注 (2) 参照) を所有する者、に限られてゐた。そして、ヘーゲルのやうに学位を他の地で、取得した者が、この大学で開講し・それによつて大学教師としての経歴を始めようとする場合には、彼は (1) 先づ、自分の学位がここで授与される或る学位に相当することの、その認定 (Zuserkennigung) を受ける必要があつた。イエーナで博士<sup>ドクトル</sup>となつた・他の開講志望者と、そのやうにして形式上同じ立場に立つたあとではじめて、(2) 彼に對し本来の資格試験が、即ち (i) 自著に基く公開討論 (Disputation) と (ii) 仮講義とが、実施された。——かうした内容や順序は、既に十八世紀の中葉から、次第に規約として定式化し始め、さまざまな経緯を経て、最近、このやうな秩序に到達してゐたのである。しかし、この世紀が降るにつれ、それらの他にも更にいろいろな要求が開講志望の博士たちに提出されるやうになつてゐた。ヘーゲルの申請に對し、学部長は最初の公式回答の際、(3) 郷国における公的關係、所有資産、今後の生活計画など個人的な生活状況について、文書等を以て説明するやうに彼に求めてゐるが、これは一七九九年十月の教授団決定に基いた照会であつた。そこには、「建学以来その第三世紀に入つた我が大学を、まるで創立し直さうとでもするかのごとく、シュヴァーベンから先生方が続々移住して来る」と囁かれたやうに、私講師やその候補者たちが大学間を頻りに (たとへば同郷の先輩を頼つて) 移動してゐた時代背景が窺はれるであらう。——それはともかく、以下、ヘーゲルの素志実現の経過を、(3) ↓ (1) ↓ (2) の順序に追ひかけて見よう。

二二三 「第二次請願書。前半」——(開講するとしても) 生計のほうは今後どうしてゆくのか、生活を保証する資産があるのかどうか、といふお尋ねにつきましては、貴哲学部が若し、才能<sup>タレント</sup>や才能に基いた生活の可能性をば「本人固有の」資産<sup>フナイマイゲン</sup>としては御考へにならず、また、生活を保証するに足る・十分な不労所得があるかどうかをお尋ねになつてゐるのでもなくて、眞実、苦境<sup>クリシス</sup>に陥つたときの保証のことを指しておいでなでしたら、愚生は至極明瞭にお答へ出来ます、さういふ緊急の場合には、第一に数千グルデン<sup>も</sup>もある資産 (ein aus einigen tausenden Gulden bestehendes)

hendes Vermögen)が、第二にヴェルテンベルクにおける愚生の具体的立場が愚生を保護致しますと。(傍点は筆者の附加)――

哲学部から第一次回章の結論を通知されると(八月十五日)、ヘーゲルは即日学位証書を提出し、それに第二次の請願書を添へた。その前半が右に掲げた陳述であつて、哲学部はこの申告に満足した。即ち、哲学部はこの陳述の内容を、「ヘーゲル氏はヴェルテンベルクと具体的な繋がりがあり、時節が来れば彼の郷國で公職に就くであらうから、必ずしも当地に長居しないであらう。更に、彼は数千グルデンの個人資産の所有をも吾々に申告して来てゐる」といふふうを受取つて、公式記録にそのやうに載せたのである。――しかし、ここで吾々は、当事者と同時代にゐるのではない利点を、解釈の中に努めて生かすべきではないであらうか。吾々は、所謂『履歴書草稿』(資格試験の約三年後に書かれ、更に百年以上経つて漸く公刊された文書)と比較することによつて、前掲の彼の言葉の、その真意をいつそう批判的に問ひ得るからである。――

先づ、「郷國との具体的な繋がり(Verhältnisse)」といふのは?――それは、ヘーゲルが一七九三年、シュトゥットガルトで正牧師候補者試験に合格し、その結果、彼にはヴェルテンベルクにおいて、正牧師候補者(Anwärter auf eine Pfarstelle)といふ身分が生じ、これが爾来(副牧師勤務は未だ済んでゐないもの)ずつと存続してゐる、といつた事情を指すのである。しかるに、客観的には同一のこの公的身分に対し、第二次請願書と『履歴書草稿』とは、ヘーゲル自身の姿勢が微妙に、しかし判然と異なつてゐる。資格試験に臨むヘーゲルの念頭には、なほ逆膽が、つまり聖職者へ転進する道が、思ひ浮べられてゐた――少くとも哲学部は彼の陳述をそのやうに理解したし、第二次請願書にはたしかにそのやうに読みとらせるものがある。

ところが、『履歴書草稿』に登場して来るのは、哲学教授への道を直走らうとするヘーゲルである。――だいたい正牧師候補者の身分を得たのは両親の希望に沿つたまでのことであり、また大学で神学を始終積極的に研究したのも、

且つ副牧師の勤務には就かないで家庭教師の道を選んだのも、それが結局は古典文学および哲学の研究にいつそう便利であるからであつた。否、このイエーナにかうして来住したこと自体が、「聖職ではなく」豫て天職と思ひ定め、たつた、哲学の道に只管専念し切るための決定だつたのである。(前稿、一六頁)——しかしこのやうな語氣の中に、吾々は、果して、人生の最高決断点に到達しながら・なほも諸可能性の間で揺れ動いてゐる不決断ないし不透明な人物を認めうるであらうか。寧ろ、彼が述べてゐるのは、学問への一筋道を最後の選択したのは、開講の地をイエーナと決定するよりかなり以前のことである、といふことではないであらうか。

そして、結局、二通の文書のあひだの、かうした相違をどう理解するにせよ——たとへば、『履歴書草稿』のときは、彼は、三年といふ歳月の経過や、員外教授への任命を請願する現在(一八〇四年)の立場などによつて、資格試験當時の記憶をいつしか改竄してゐたのだ、といふふうには心理的に理解するにせよ、あるひははじめに、将来帰郷する可能性を彼がほめかしたのは、開講権を取得しやすくするための駈引ではなかつたか、と推定するにせよ、等々——いづれにしても、彼が、立ちいつた解釈が必要なほどに相違した説明を前後に与へたことは事実であつて、それは、彼が一応「感じがよく、信用しうる人物(Guter und solider Mann)」——哲学部長は初対面の際、さういふ印象を受けた——に見えながら、実は、(恐らくは自分自身でも)しかとは断定し尽せない不透明な動揺を内に蔵してゐた、といふことではないであらうか。しかもこの不透明さは、彼の内面的生全体の実存的不安から、つまり、学そのものへ集中しようとする運動も、それと同じく内面的生に属しなから、いはば「内における外」とも言ふべき遠心的・世界的運動(たとへば評論活動)も、更にそれらの相互競合さへも、すべて無化するやうな不安の中から、発現してきてゐたのではないであらうか。(前稿、一七頁)——ともあれ、いま暫く第二次請願書の分析を続けて見よう。

二四 また、「資産数千グルデン」と言ふけれども、それは、どこまで彼を現実<sup>ファクタル</sup>に支へうる能力であつたのだらうか。——

一七九九年三月、ヘーゲルは父親の遺産として、三一五四グルデン餘りを受取る。<sup>(19)</sup>この金員は、たしかに、彼に、家庭教師といふ孤独な環境から離陸し・大学私講師の世界へ向けて飛翔する決意を固めさせるのに、十分な額ではあつた。しかし、それは客観的には、どれだけの価値のものであつたのだらうか。

「フランクフルトに一年半滞在しておりましたあひだに、私は文筆の仕事をし、サラリーを儉約して五〇〇フロリン (Florin, グルデンのフランス名) を貯めました。五〇〇グルデンあれば、世界のどこにゐても、フランクフルトほど物価の高くないところなら、少なくとも一年間の経済は保証されると思ひます。」——一七九八年十月十日、ヘルダーリンはホンブルクから、母にあててこのやうに書き送つた、尤も詩人のこの胸算用は大きくはづれ、十一ヶ月目から立続けに送金を仰ぐことになるのであるが。<sup>(20)</sup>即ち、青年哲学者に分与されたものは、詩人でも六十三ヶ月間は生活出来るほどの額であつたのである。

また、『イエーナ大学史』は次のやうな、興味深くはあるが少く不思議な数字を挙げてゐる。——イエーナでは、当時、大学生がかつかつ生活してゆく、(nordringig leben) のに、年間約二五〇グルデンは必要であつた。しかし初等中等教育の教師は概して一二五グルデン以下、大ていの場合、八七・五ないし一〇〇グルデンしか所得がなかつたが、それ位は未熟練勤労者や日傭ひでも稼いでゐたのである、と。——従つて、吾々の哲学者は、学生貴族なみの生活を過す場合には、イエーナで約十二年半は持堪へられたのでないだらうか。

勿論、所得体系も物価体系も、居住地により職業により身分によつて全くまぢまぢな時代であつた。社会的身分と実質的収入との間には、屢々餘りにも大きなアンバランスがあつた。たとへば、ヘーゲルは、一八〇五年二月に員外教授として任用され、翌年夏には、宰相ゲーテの發議で、年俸が特旨を以て承認されるのであるが、それは年額一〇〇ライヒスターレル (約一二五グルデン) でしかない。しかるに、一八〇八年、ニュルンベルクで高等<sup>ギムナジウム</sup>中学校の校長兼教授となつたヘーゲルの、その年俸は、何と一一〇〇グルデンであつた。——

他方、次のやうな諸事実も勘合さるべきであらう。(1) フランクフルトのやうな物価の高い土地においてさへ、そして詩人でさへ、一年半に五〇〇グルデンを貯へ得てゐること。(しかも、哲学者の同地滞在はほぼ四年におよんでゐる。)(2) ヘーゲルは、一七九三年以来、一八〇五年六月末まで、シュトゥットガルトの宗務庁(Konsistorium)を通じ、正牧師候補者として年額二〇グルデンを故国から受け取つてゐたこと。(注(18)参照)(3) イエーナ来住以後、ヘーゲルには新しい収入の途が開かれたこと。たとへば、『哲学評論』の発行者たる書肆コッタは、その発行部数が僅少であるにも拘らず(年間五百部程度と推定される)、印税オラクルを筆頭編輯者シェリングに「一括して」支払つてゐた。(H・ブフナー博士の調査結果)<sup>(22)</sup>。それが、この論評誌全体の少くとも六〇パーセントを執筆した副編輯者に全く届かなかつた、とは考へられない。——しかも収入源はこれらだけではなかつた。寧ろ、私講師にとつては、聴講料こそ米塩えんの源となるべきものであつたのである。(4) 『キムメルレ資料』によれば、ヘーゲルがイエーナ大学で実際に講義し得たのは、一八〇一〜二年冬学期から一八〇六年夏学期までの都合一〇ゼメスターであるが、この期間の講義目録カテゴリーに現はれた・彼の講義題目の数は二十一に達する。そのうち、九つの講義については、それらが実際に行はれたといふ直接間接の証拠があり、更にそれらのうち七講義までは聴講者数も判明してゐるのである。即ち、この七講義には、最も多いときには三〇名、少い場合にも十一名、総数一四二名の聴講者が訪れてゐる。(但し、実施されたといふ証拠のない十二講義も、すべてがキャンセルされたとは考へられないし、また、掲示板で公示されるだけの追加講義を、彼が一度も行つたことがないかどうか、判定するに足る資料もない。——聴講者は、そのうち五講義については三ラウプターレル<sup>(23)</sup>(約六・一グルデン)を、一講義(聴講者十一名)については二ラウプターレルを納入した。(十七名が聴講した・一八〇五〜六年冬学期の「哲学史」講義については、聴講料の額は不明である。)従つて、イエーナ大学出納局は、ヘーゲル講師の六講義の聴講生から総計三六四ラウプターレル(約七四〇グルデン)を五年間にわたつて領収したことになる。その中からどれだけのものがこの私講師に還元されたかは詳らかではない。——然し、いづれ

にせよ、『キムメルレ資料』を仔細に分析するならば、右に記した限りの数字は、まづ確實に算出し得るのである。加へて、ザクセン・ワイマル公がのちに彼に允許した年俸は約一二五グルデン（一四九頁）であつたことを、(1)から(3)までの状況と考へ合せるならば、今や吾々は、イエーナ来住後のヘーゲルには、不十分ながら、その収入があつた、と推定しうるのではないであらうか。それ故、「資産数千グルデン」は、たしかに、右のやうな諸条件と相待つて、彼の学問的構築をば実質面から極めて強力に支へ得た筈のものであつた。

二一五 まさにさう推理せざるをえないからこそ、次のやうな諸事実に出逢つたとき、吾々は一入意外の思ひにうたれるのである。——即ち、一八〇四年十二月、「資産数千グルデン」を断言してから未だ僅か三年四ヶ月にしかならない時点で、彼が早くも、借金の返済の猶豫を、しかも同郷の輝ける先輩ニータンマー（Niehammer, Fr. I.: 1766-1826）<sup>(24)</sup> に対し乞うてゐるのを見、そしてその更に三ヶ月後、この人に用立ててもらつてゐた六〇ターレル（少くとも約七一ないし七五グルデン）<sup>(25)</sup> をやつと半額だけ、苦心慘憺の末、返済しえたにすぎぬ姿を見出して、吾々としては聊か驚き且つ呆れざるをえない。しかも、この頃になると、ヘーゲルは、員外教授に任命されたばかりなのに、もう、イエーナを去りハイデルベルクその他に新しい地位を見出さうとして積極的に動き廻つてゐる。が、そのことは、彼の経済的苦境の件とともに、この大学町で次第に周知のこととなりつつあつた。いな、カール・アウグスト公や顧問官たちまでもが聞知しつつあつた。——いづれにしても、そのやうに窮し且つ浮足立つてゐる彼の現実の姿と、さきほどからの推論によつて描出されうべき像とのそのあひだには、何といふ大きな開きが存することか。にも拘らず、この罅隙を充填するに足る伝記的資料は、今の所与へられてゐない。

しかし、想像力の馳駆を待つまでもなく、吾々は端的に断言出来よう——彼の資産なるものは実は客観的には（つまり苦境のときには）、彼に力となるほどのものでなかつたのだ、と。そして吾々は更に、若干の状況証拠からして、彼自身も亦自分の足許のそのやうな脆さ崩れ易さを意識してゐたからこそ、資格試験のとき、あのやうに

身勝手なまでに攻撃的に振舞つたのだ、といふふうに推理することが許されるであらう。その状況は又、多くの私講師候補者にも共通した一般的状況であつた。

二一六 ここでひとつの比喩を用ひて、彼ら出願者の立場を具体的に思ひ浮べて見よう。——教授団の諸賢諸公(Sh. nior, ceterique Assessores)に開講権の認可を願ひ出てる候補者たちは、いはば、さる地の同業組合聯合の親方衆(Paisen)に開業認可を申請してゐる・新来の職人(Tungsselle)のやうな立場にあつた。他の地のギルドが彼らについて、その徒弟修業の修了を証明してゐる以上、また当地の君主が領国の文運興隆のために國帑(こくど)を開いて自分たちに給禄してゐる以上、ギルド聯合としては、この開業申請は、為しうる限り受理し認定しなければならなかつた。従つて、候補者は認定の段階までは主導的であり得た。のみならず、彼が既にしつかりした資格論文を仕上げてゐる場合には、学位証書を提示し・認定料および検定料を納入することによつて、試験は実質的にはほぼ終了した、と言つてよかつた。そのあと、公開討論の日までに候補者が済ませておくべきことといへば、当日臨席の応答者・反論者および学部長以下の諸教授用に、豫め式辞と謝辞とをラテン語で起草しておくことぐらゐしかなかつた。——そして実際、ヘーゲルがそのために用意した草稿(26)が見出されてゐる。また、認定料としてルイ金貨四枚(換算して、約二八・五グorden)、検定料として二スベキェス・ターレル(換算して、約三・五グorden)を納入することにより、彼の名は、八月二十日付けで、ザクセン公国の博士名簿に記入されるのである。このやうに、認定手続きのほうは格別のこともなく済んだのであつた。(学位証書は既に十五日に直接提示されてゐる。)——だが、それでは、肝腎の資格論文のほうはどうなつてゐたのであらうか。時機からいへば、少くとも、九切にまであと一簣(いっさい)、といふ段階に来てゐる筈であつたけれども。

しかし、候補者にとつては、資格試験そのものよりも寧ろ、開講権を得たのちの私講師生活こそ関心の的なのであり、それがまた、果てしない不安の根源でなければならなかつた。——専門能力が確認され開業が承認されたとして



も、そのあと、その營業が果して、そしてどう成り立つてゆくかは、勿論当の職人個人の力量にかかつてゐる問題であつて、ギルドの親方衆にそこまで面倒を見るべき責任はない。同様、開講権の認可といふのは、「構内での講義、勝手たるべし」といふ御墨付きの下付のことであつて、俸禄や給与の約束ではなかつたのである。(だからこそ、營業にあつて、營業資金の有無や程度についてあれほど念を押ししたではないか。そして貴君は胸を張つて「資産数千グルデン」と申告したではないか。――従つて、新私講師を待ちうけてゐるのは、大学教師として生き残るための、苛烈極まりない闘争の一日一日であつた。即ち、開業資金が涸渇してしまはないうちに、彼は何としても營業実績をあげて顧客を確保しなければならなかつた。資金が減耗し尽すまでに彼の工房なり店舗なりが好評を博し得たならば、あるひは金主の、更には学芸の庇護者の目にもとまるかも知れない。だが、さういふ幸運に恵まれない場合、彼は空しく工房を閉ぢ店をたたんで他の地に去らねばならなかつた、そこで再度運命に挑戦するために。――たとへば、少しのち、イエーナ大学哲学部の学生のあひだで、ヘーゲル、フリースと並び、最も崇拜者の多かつた・かのクラウゼ(27)は生涯不住不遇の天才の一例なのである。

それ故、青年哲学者が掌中にした亡父の遺産は、「今だ！ 戦機はもうあとには来ない」といふ・生涯戦略上最高の決断を彼に強ひたばかりでなく、実は、いつ果てるとも逆賭し難い死闘の渦中に彼を投ずるものであつた。従つて、資格試験の頃に彼が発出した言辭や文書の、その不透明さ、また不整合性は、それを単に合理的に解釈し、戦術的駆引きや性格的偏倚にのみ帰すべきものではないであらう。況んや、全く懸絶した状況を尺度として――たとへば、吾々にもなほ残存してゐる読書人の理想を以て、あるひは、法規と制度との網密が「摇篮から墓場まで」の一切を(勿論、大学をも)管理してゐる産業社会のその発想を以て――批評してはならないのである。それは、あくまでも彼の現実的狀況に即して、従つて生そのもの、昏さの中から現出した実存的不安として、理解さるべきではないであらうか。

——個人の現実的生を支配してゐるのは、この時代においても、まだまだ運であり偶然であつた。制度的なもの多くはただ無秩序に錯綜するのみで、なほ到る所に遺漏があり、個人の生涯計画を安んじてその上に展開出来るやうな基盤では到底あり得なかつた。さういふ堅牢な実在的聯関に厳しく制約されながら、そこから学的体系といふ理念的聯関を創り出すことは、さながら、爪先で浅瀬を探りつつ奔流を渉るにも等しかつた。この状況では、精神的生は、ただ自分自身に内在するものだけを（それがいかに青臭く粗削りであらうとも）信じきつて、捨身に生きるほかないであらう。然しその一方、個人も時代も、もはや夢を見なくなるほどに老化してはゐなかつた、つまり、急湍に架橋なきは著しい不正であり不合理であると非を鳴らすやうな驕慢を未だ知らなかつたのである。——

かくして、資格試験といふ具体的な問題を機縁に、ふたつの意志が、つまり正教授会と私講師候補者へーゲル氏とが、ここでひとつの場において、相見あひまえることになつたのである。前者が意図するのは学則の勵行であり、その目的とする所は大学の權威の確立であつた。しかし、前者のこの立場に留意するだけの餘裕が後者に——即ち、実存的不安に耐へながら敢へて精神的生（それ自体が亦、求心的構築的意欲と外向的論評的志向とのあひだの緊張であり競合であつたけれども）を創出しつつあるこの候補者に、果してどこまで残つてゐたであらうか。寧ろ、彼においては自分の企投が自分自身の運命となり、自分の課題以外には最早何ものも（自分の実情さへも）目に入らず、かくて兩餘の一切は手段化してしまつてゐたのではないだらうか。——そして、両者の立場の・さういふ相違ちがひは、いな、食違くひだひは、先程から吾々が分析して来たやうに、媒辞が周延するにつれて、つまり、資格試験の内容が生活状況の申告から認定手続きへと(3)↓(1)、一四六頁参照）解明されてくるにつれて、愈々觀察者には鮮明に看取されてきてゐるのである。従つて、当面の研究主題のために更に課せられてくる研究は、進んで、実在的聯関における限りでの資格論文をば解明し(↓(2)、それによつて、資格試験、全体の実在的聯関の解明に完結を齎す（外堀を埋め終る）ものでなければなら

ない。といふのは、精神的生の理念的聯関を自体的に現象させるためには、その現出を實在的に制約してゐるもの全体がまづ見渡され且つ見通されねばならないからである。つまり、『遊星軌道論』の学説内容を純粹に對自的に（勿論、原著者の体験聯関にも制約されないで）概念把握する（ベグライフェン）ためには、吾々は媒辭の周延（實在的制約全体の提示）を急がなくてはならないのである、その完遂は同時にこの兩者（候補者と正教授會）が對立する惡無限的な次元を廢棄し、理念的聯関へ吾々を超出せしめるであらうから。

### 三 資格試験の迂餘曲折

三一〔第二次請願書。後半〕——本日、貴学部から、候補者は開講許可を受けるに先立ち、豫め（資格論文に基いた）公開討論を行はねばならぬ、といふ御考へをお知らせいただきました。この問題に関して貴学部では、(1) 来学期の講義目録に掲載さるべき講義題目等は、（今から月末までの）この十二日間ないし十四日間のうちに提出されなければならぬが、(2) この期間内に資格論文を書き、印刷し、刊行し、論旨の弁明まで行ふことは不可能であると御判断なのではないか、と思はれます。然し、若し愚生がこの期限内に資格論文の大部分か又は全部（*den größten Theil oder die ganze Dissertation*）を提出したならば、学部長殿も貴学部もきつと御満足なさるであらう、と愚生は確信致します。と申しますのも、愚生が求めておりますのは、開講許可のない・ただの認ノストロフィカチヤ定とその公告だけなわけではありませんし、同様、資格論文の印刷や論旨の弁明が遅延した場合（その場合でも、公開討論は来月中に致したいと存じますが）、貴哲学部は一旦認可された開講権をも停止するだけの権限をまさしくお持ちなのでありますから、愚生の目的が結局何ひとつ実現しなかつたといふことも生じ得るであらうからです。（以下省略。）——だが、これはまた何と晦澁な表現であらうか。再読し、更に復読を重ねても、彼の意図がなかなか見えてこぬありさまに、神経が苛立つのを、ひとはいかんともし難いであらう。しかし、学部長をはじめ正教授團は、この文面のうちに彼の真意

を読み取つてゐた、即ち婉曲にすぎざるほどの彼の言葉のその裏側には、実は、全く自己中心的な積極的、逆提案が隠れてゐたのである。それは、次のやうな内容を含むものであつた。即ち——

(1) たしかに現在いまとなつては、この資格試験を期限内に学則通り完遂して開講権ペニアレゲンデを得、そのうへで、講義目録への掲載を申し出ることは、時間的に最早不可能であらう。従つて、その代りに、(2) 資格論文の原稿を少くとも大部分、期限内に(つまり講義目録の印刷開始までに)提出することによつて、当候補者に、開講すること、並びに講義目録へ講義題目を掲載すること、のこのふたつを許可していただけまいか。勿論、資格論文は必ず完成して提出し、公開討論も実行する所存である。但し、論文の印刷や討論の段取りなどが手間取つた場合、公開討論の実施は来月、といふことも有り得よう。しかし、(3) 万一この約束が、次学期の始業までに実行出来なかつたときは、哲学部がその権限を行使し、いつたん認可した開講権を停止(suspendieren)せられても、当候補者に異存は毛頭ないと、さう申し上げる。——さういふ提案が実は表現されてゐたのである。端的にいへば、未完草稿の(大部分とは言つても、要するに)一部分をいはば担保の品として、開講権および掲載権が前渡しされるやうに、換言すれば、論文は未完・討論は未済であるにも拘らず、それらの義務を完済した候補者と同等に扱はれることを、彼は申し出てゐるのであつた。

それにしても、かうした窮餘けつきの下策に(いな、正教授会の機嫌を損じかねないといふ点では危道ですらある方途に)出るくらゐなら、どうしてもつと早くから、時宜に適ふやうに手続きを進めておかなかつたのか。イエーナに来て住して既に半歳餘。その間、彼は何にかまけてゐたのか。——然り、彼は同一性哲学の吸収と敷衍とに自ら身を挺してゐた、そしてつい先月、『差異性』論文を書きあげたばかりの所であつたのである。

三二一 いっぽう学部長の方は、前々日(八月十三日)に発出した最初の回章の中で既に、この一件の処理に関し、ひとつの試案をば提示してゐた。——「候補者へ——ゲル博士は、来学期用講義目録の印刷開始(八月末)までに、公開

討論か、又は、仮講義を実施しなければならぬ。但し仮講義の方を撰んだ場合は、同氏は更に、来年夏学期の講義目録が印刷されるまでに（即ち来年の復活祭以前に）、公開討論を行ふやう義務づけられる。」——そして学部長自身の氣持が、二番目の可能性のほうに傾いてゐることは、前後の事情やこの文面の上から略々察し得る所であつた。然し、肝腎の問題、即ち、開講権および掲載権がいつ・どの学期以降発効するのか、来る冬学期からか、それとも来年夏学期からのことになるのか、それは、少くともこの文辭だけでは判然としない。第一次回章を検討した正教授会が、結論として「該候補者は開講リクテンゲ、レクテンゲ許キョクを受けるに先立ち、公開討論を行ふべきである」といふ・学則上全く自明的な判断を下したのは、この学部長試案では、仮講義を済ませただけの候補者が早くも次の学期から開講し得る、といふ事態になりかねないからでもあつた。そしてつい最近にも、その例があつたばかりなのである。

他方、ヘーゲルにとつて、来学期から開講する可能性より以外の可能性、たとへば来学期は差当りこの大学の博士名簿に記入されるだけにとどまる可能性は、全く慮外のこと、いな滅相もないことでさへあつた。従つて、出願の翌々日、哲学部の意思を知らされるや否や、彼は即日、既述のやうに第二次請願書を提出する。その前半が、あの不透明で疑点の多い身上申告であり、その後半が今しがた見た通りの、極めて攻撃的な逆提案なのであつた。

三三三 新しい週が明けた十七日、学部長は、この新請願書に対応するため、第二次回章を發出する。その中で学部長は次のやうな修正試案を開陳した。——学位の認定手続きが済んだあと、講義目録の印刷開始までに、従来かういふ場合に通例となつてゐる仮講義をば必ず、実施させ、といふさういふ条件で、氏名と講義題目とをカタログに掲載することを、ヘーゲル氏に大目に見て (naachlassen) やつてはどうであらうか? ——然し、これは、公開討論を行はずとも既に事実上開講が許可されることを意味するであらう、つまり、正教授会のこのたびの判断に抵触する点では、義務の履行に先立ち権利の先渡しを願ひ出てゐるヘーゲルの逆提案と、それほど齟齬そごのものではない。かくして彼の逆提案の波紋は広がり、状況は尖鋭化するのである、建前からすれば、老熟者の判断ゾーアズと青年の逆提案とは到底

両立しえなかつたからである。

正教授会は論議で沸いた。——「講義目録に載せてほしいのなら、学則で決められた通り、先づ公開討論を實行するのが当然ではないか。どうしてこの問題によつて、最近折角確定した規約が又しても穴だらけにされなくてはならないのか。」「吾々がこの問題でヘーゲル氏に譲歩した (nachgeben) 場合、すぐにそれが前例となつて、みんなが講義目録の門限直前に、資格試験の受験を申し出るやうになるだらう。さうなると、候補者にその都度門限の注意をするといふ・まことにやりきれない仕事を、学部長は引受けねばならなくなるだらう。……」「仮講義といふものを、候補者がすぐには公開討論を行へない場合の・単なる応急手段のやうに考へてはならない。それは、私講師たるに値しない候補者を却けるためにも、公開討論のほかに「それと並ぶ」義務とすべきものである。……」等々、等々。そして正教授に就任して日が浅いほど、ヘーゲルの逆提案を強硬に拒否してゐるのである。かくして、事態は全く暗礁に乗り上げたかに見えた。

前学部長ウルリヒ教授 (Johann August Heinrich Ulrich; 1746~1813) は、つい先日、この候補者が『差異性』論文を脱稿したとき、当局側の検閲官をつとめ、その筆者を「頭が切れる哲学者 (ein scharfsinniger Philosoph)」といふやうに鑑定したばかりのところであつた。哲学関係の資格試験(ベリタツター)が行はれる際、彼の発言には特別の重みが認められてゐたのであるが、然し現在の彼の脳裡には、ヘーゲルへの評価もさることながら、寧ろフリードリヒ・シュレーゲルの資格試験のときの——それは昨年夏から今年三月までかかつて、やつと完了した——甚だ後味のわるい一部始終(28)が去来してゐたに相違ない。

この浪漫主義者には、教授資格を未だ得てもゐないのに、早くも自分の開講計画を密かに世間に流布させ、「小説『ルチンデ』の作者の哲学体系とはどういふものか、是非とも聴講したい」と煽られた群集の中から夥しい豫約者を集めてくる、といふやうな、さういふいふがほしい所があつた。彼の資格試験は特例によつて軽減され、十月十八日

(一八〇〇年)には先づ仮講義が行はれる。しかも既にその時点において、彼の講義題目がこの冬学期(一八〇〇—一〇一年)の講義目録の中に、正式に掲載され公けにされてゐたのである。にも拘らず、即ち、實際上既に講義権を行使してゐるにも拘らず、この詩人は冬学期が終るまで公開討論を實行しようとしなない。やうやく三月十四日になつて実施されたそれも、資格論文に基いてではなく、若干のテーゼ——それらは、彼の講義全般の方向を概観させるやうなテーゼであることが指定されてゐた(Theses, die so etwas wie eine *Schedula lectionum* enthielten, ……)——に基いてのものであつた。但し、彼には、後日学部長のもとに提出すべき資格論文のその表題を、これらのテーゼと一緒に印刷して公示する、といふ義務が学則に従つて負はされてゐたけれども。

更に、この公開討論会そのものが、全く見苦しく且つ忌はしい騒動になり下つてしまつたのであつた。当日、東洋学のアウグステイ教授(Johann Christian Wilhelm Augusti; 1771~1841)が哲学部側の公式反論者として彼のテーゼに切り込むと(そこにはたしかに嫌がらせがないことはなかつた)、シュレーゲル自身が目には目を以て報ひたばかりか、シュレーゲル派の学生から一斉に、喚声・怒号・弥次……が飛ぶ騒ぎとなり、口論の嵐と討論会そのものごとを終らせるのが、当時学部長のウルリヒ教授にはやつとのことだつたのである。しかもシュレーゲル氏に實際上先渡ししてある開講権を今更回収するすべもなかつた。この一件がきっかけになつて、哲学部は公開討論に関する規定のその改正に着手する。そして改正規定が確定したところへ、資格試験を願ひ出たのが、吾々のチュービンゲン大学哲学博士なのであつた。

従つて、現学部長が提示した・試案(第一次回章)および修正試案(第二次回章)はどちらも、前学部長が候補者シュレーゲル氏に対して執つた措置に比べ、講義目録の印刷開始以前に義務のうちの少くともひとつを終らせようとしてゐる点で、いつそう厳正となつており、多少とも容認し易い内容ではある。とはいへ、公開討論を先務として規定した現在の学則本文には、候補者自身の逆提案と同様、明白に矛盾してゐるのである。従つて、前学部長が結局、学則

の例外規定を適用するやう判断したのは、必且当然のことであるやうに思はれる。それはまた、彼にとつて、学部長在任当時の自分の措置を義認し追認するやうな規定でもあつた。即ち、「全くやむを得ない事情により、公開討論を自分の講義の公示に先立つて実施出来ない場合、その候補者は、特例による免除を豫め学部まで願ひ出で、その許可を得てから、〔当大学で講ずべく計画中の〕諸講義の綱要 (Schedula lectionum) を、資格論文への表題と同時に公示し、それに基いた公開討論を少くとも八日から十四日以内に実施しなくてはならぬ」といふのがその内容なのである。この例外規定に準拠してウルリヒ教授は、「学部決定 (Conclusum Facultatis) を反古にする (durchbohren) よりは寧ろ、シュレーゲル氏の場合と同様、ヘーゲル氏にもテーゼについての公開討論を許可すべきである。同氏は又、仮講義も行はねばならない」と、その判断を示したが、それが哲学部の大方の意見となつた。

三四 ここにいたつて吾々ははつきり理解しうるのである——何故哲学部は学則本文に基いて、この候補者にその開講を、断乎として次の学期（つまり一八〇二年夏学期）まで待たせることが出来なかつたのか、その理由を。——それは、そこまで厳格に学則を彼に適用するならば、シュレーゲルへの対応との間に餘りにも大きな懸隔が生まれ、却つて遙かに大きな不正を哲学部は犯すことにならうからである。のみならず、それは哲学部自身が前学部長の措置を、従つて結局は自分自身（哲学部）を否定することにならうからである。——他方、逆提案者も、これ以外の仕方では決して説得されなかつたに違ひない。彼の提案は、たしかに自己中心的な内容のものではあつたが、それでも、シュレーゲルに与へられた権利の数々に比べれば、正教授会の意向に敬意を払ひ、それを精いつばい斟酌し、自分の要求を自らぎりぎりまで制限した・彼なりに控へ目のものであることも亦明らかであつた。——自分は、資格論文の大半を講義目録の印刷開始までに提出する、公開討論は遅くとも九月中に（即ち冬学期が始まる前に）実施する、といふふたつのことを、そしてそれらを実行しなかつた場合には開講権の停止をも甘受する、といふことまで、約束してゐるのである。シュレーゲル氏の場合と比べていただきたい。彼は、やつと今年の三月半ばになつて、テーゼに



ついでに公開討論を済ませたのであるが、開講権のほうは既に昨年の夏以降、完全な行使が許されてゐるではないか。そこまで自分と彼との間に差がつかねばならないとしたら、その理由は何か、うかがひたい。そのやうにヘーゲルは詰問したことであらう。そして、彼の盟友シュリングが浪漫主義者のサークル、特にシュレーゲル兄弟と深い交友関係にあつたことを考へ合せると、これから受験しようとするヘーゲルが、シュレーゲルの資格試験について、その経過を何も聞知してゐなかつた、とは到底考へられないのである。

いづれにせよ、学部長フォイクト教授が、その第二次回章(十七日付)に対する(従つて同時に彼の第二次請願書に対する)哲学部の・前述のごとき意嚮をば、翌十八日、この候補者に伝へたとき、彼はあつさり同意する。事態はここに、テーゼによる公開討論の実施と資格論文の(冬学期開始以前の)提出、といふ・さういふ方向を目指して動き始めるのである。

この場合、舞台を設営し事態を前進させる(*promovieren*)ことは、いふまでもなく、主に候補者(*Hablitand, Promovius*)の側の責任であつた。かくして数日のあひだヘーゲルは多忙となる。彼は先づ哲学部に赴き、認定料および検定料を納入して認定手続きを完了する。(その結果、八月二十日付けで、彼の名がザクセン公国の博士名簿に追加記入されたことは既述の通りである。)次いで彼は、公開討論についての特例措置(*Dispensation*)を願ひ出て許可されるが、テーゼによる公開討論は一週間後の二十七日(木曜日)に実施されることになる。(前掲の例外規定に従へば、どんなに急いでも、それ以上早い施行は許されない。)

然しさうなると、哲学部の学期カレンダーの運行とのあひだに齟齬が生じてくるのである。——もともと、次の学期の講義題目は、講義目録に掲載されるだけでなく、哲学部の公用掲示板(*das schwarze Brett*)にも掲示されたが、実際上は、この掲示板用の題目草稿(*Leconssettel*)が、講義目録のほうにも下敷きとして転用されてゐた。ところが、この掲示用草稿は、ヘーゲルにセットされた公開討論の日(二十七日)よりも前に、既に印刷所へ廻されねばならぬ(30)。

候補者がこの冬学期のために計画中の講義題目（即ち、論理学および形而上学）を、彼が講義資格を取得し終へるに先立つて印刷に付することは許されるかどうか。もちろん、正教授会の諸賢、特に論理学形而上学講座の担当者（後のヘニングス教授）がそれに同意（同意）を与へれば問題はないであらう。——つまり、講義目録への掲載問題が、ここでの形式において再度問はれて来てゐるのである。

それだけではない。折柄夏期休暇のさなかでもあり、又、他の公開討論会が二十八、二十九日と（きび）踵を接してゐることもあり、討論の公式参加者（即ち応答者および反論者）を見出すことは容易ではなかつた。為手の殆ど見当らない反論者に、この際、特に学生たち（students）を加へることは許されないのであらうか。——さういふこまごました具体的問題が、学部長に第三次回章の発出を強ひたのである。

八月二十一日付のこの文書は、先づ慎重に、ヘーゲル氏に対する今回の資格試験の・その実施要領について、正教授会に確認を求めてゐる。ヘーゲル氏への資格試験は、(1) テ、I、ゼ、に関する公開討論、(2) 資格論文、(3) 仮講義、といふ三項目にわたつて実施する、但し(1)には講義目録の印刷開始までに、(2)および(3)には冬学期の開始までに、といふ実施又は提出の期限を設ける——と、さう処理することに致しても御異存はないであらうか。所定の認定料と検定料とを完納したならば、それで彼を当大学の博士名簿に加へても宜しいかどうか。——

それらについて念を押してから、学部長は揭示用草稿の問題に移り、次のやうに提案するのである。——公開討論の準備が着々整つて来てゐる現段階を顧みて、学部長が、この候補者の揭示用草稿を公開討論の日よりも前に印刷所へ送るやう手配したらいけないであらうか。仮に、来週の末になつても未だ公開討論が実施されてゐない、といふ事態になつたとしたら（——それは方にひとつも無いと思ふけれども）、その場合、この候補者が計画した諸講義を、講義目録の本格的印刷（今月末開始）に先立つて取りのけることは勿論十分に可能である。——さう提案したあとで、最後に追伸の形で、反論者の中に学生をも加へうるか否かの問題に関し、学部長は正教授たちの意見を徴してゐる。

そしてこれらの諮問に対し、正教授会の判断は、いづれの問題についてもすべてJa!であつた。ここまで来れば、もうそれ以外の判断はあり得なかつた。

かくして、事態はこのテュービンゲン大学哲学博士にとつて、豫期してゐたよりも遙かに好都合に進展しつつあつた。彼が執着してゐた掲載権は（公示用草稿の問題を介して）事前に保証されたし、資格論文についても、その負担が、討論のほうは講義全般の基礎的テーゼについて行ひ・論文そのものは冬学期開始までに提出すればよい、といふやうに（学則が本来定める所に比べれば勿論、彼自身が哲学部に提案した条件―それが実現すれば、彼は論文の少くとも大半を旬日のうちに提出することを義務づけられるのだが―と比較してもなほ）全く軽減されたからである。彼は今や安心して自分の計画に没頭することが出来た。その結果、彼は数日のうちに、反論者として、ニータンマー、シュリングの両教授およびバンベルク出身の学生シュヴァルト氏を、また応答者として、シュリング教授の弟、若年十九歳の学生シェリング氏を、それぞれ確保する、つまり、正式参加者の殆んどが同郷のひとであるやうな公開討論会を組織したのである。<sup>(31)</sup>また現在執筆中の管の資格論文に関しては、その表題『遊星軌道論』が既に第三次回章の発出に先立つて学部長の許に届けられてゐたが、いまそれは回覧されるのみならず、掲示板にも公示される。他方、彼は公開討論会のためにテーゼを十二箇条、ラテン語で認<sup>した</sup>めてプラーゲル（Pragen）社に託したが、それが五ページの小冊子として刷り上つて来る。（その表紙には、学則通り、「哲学の資格論文『遊星軌道論』に前提されてゐる諸テーゼ『Dissertationi philosophicae De Orbitis Planetarum praemissae Theses』と印刷されてゐた。この小冊子が正教授会に配布されたのは恐らく八月二十三日（日曜日）のことであらう、かういふ性質の文書は日曜日の礼拝後に配布されるのが大学の規定であつたからである。<sup>(32)</sup>――

このやうに、設営はすべて順調にいつてゐるかのやうに見えた。然し資格論文そのものは、いつたい何処まで抄つてゐたのであらうか。少くとも、あと二、三步といふ所にまで達してゐなければならぬ筈であつたが……。ところ

が、馳駆画策の渦中からクリープシュタイニッシェル・ガルトン<sup>(33)</sup>の住居に戻つて来たとき、彼が先づ取りあげてゐたのは、『遊星軌道論』の草稿ではなく、数日前『エルランゲン文学新聞』の編輯者メーメル氏<sup>(34)</sup> (Gottlieb Ernst August Mehmel; 1761~1840) から送られて来たばかりの書物、即ちブーテルヴェークの『思弁哲学の基礎』なのであつた。メーメルはこの書物の書評者をもとめてシェリングに打診してみたとき、このひとの推薦によつて更めてヘーゲルの名を知り、彼に接近を試みたのである。両者のあひだに合意が成立しメーメルが最終の回答を發したのは八月十六日であるから、ヘーゲルはその一兩日後にはこの書物を受取つてゐた筈である。そして彼が本文二百四十二頁のこの書物の書評を書きあげてメーメル宛てに發送したのは、実に公開討論の前日のことであつた。<sup>(35)</sup>

しかし、さうなると、ヘーゲルは、イエーナ大学哲学部に資格試験の実施を願ひ出たまさにその時、同時に書評の仕事を進んで、引受けてゐたことになる。従つて、十五日に彼の行つた逆提案が、駁引のない・真実の吐露であるとしたら、(彼が哲学部から例外規定の適用を知らされたのは十八日のことであるから) 彼は、当初、書評と資格論文といふ・ふたつの純学術的な仕事(の少くとも大部分)を、しかも旬日のうちに仕上げるつもりであつたことは間違ひないであらう。彼は本当にそこまで自分の能力に自信を持つてゐたのであらうか。そこに自己過信、いな、過剰なまでの攻撃性がありはしなかつたか。あるひは彼は、哲学部はどつちみち、シュレーゲルに対して執つたのと同じ措置を自分に対しても執らざるを得なくなる、と見透して(ないし見縊つて)ゐたのだらうか。とすれば、あの逆提案は実には戦術的駁引ないし虚勢であつた、といふことにならう。しかしいづれにせよ、この時点での彼の軒昂たる活気、また行動の積極性には瞠目せしめるものがある。

三二五 他方、正教授会は甚だ後味の悪い思ひに悩まされてゐたに相違ない。学則励行といふ建前は、門限後の無理押しの前にあへなくも潰え、辛うじて名のみが保たれたからである。第三次回章に対する諸教授の判断<sup>ウツツム</sup>からは、いたる所に憤懣や遺憾の情念が噴き出して来てゐる。「カテーゼの討論」にまで軽減するやうな例外的措置は、絶対に

提案していただきたくなかつたのに……。いづれ特例は前例となり前例は通例となるであらう。「ヘーゲル氏が約束を守つて、資格論文を討論のすぐあとに (gleich hintennach) 届けるやう、私は断乎要求する。公用掲示板に掲示するときになつて、資格論文が提出されてゐない場合には、同氏には揭示も講義も許してはならない。」「学部長殿には、員外教授か私講師を少くともひとり、ヘーゲル氏への反論者として探し出されるやう、是非努力していただきたい。多分ウルリヒ教授殿御自身もお断りにはなられますまい。」等々。——さう言はれては前学部長も弁明せざるをえなかつた。「折角ながら、私は他のふたりの候補者に、反論者をつとめることを約束してしまつてゐる。それに、私としてそれが特例として許されることではなかつたら、ヘーゲル氏の一件であのやうな提案をしなかつたであらう。しかし今後は、教授資格を得ようとする者にはすべて、候補者は正規の資格論文を提出しなければ開講を許されない旨を、前以て通告しておくべきである。」——

お互ひのあひだのかうした気まづさは、当然、その機縁となつた人物のその人柄や言動に対する苛立ちを、ないしは不審の感じを、正教授たちの中に惹き起しつゝあつたに相違ない。——さういへば、思ひ当る節もないわけではない。実は、先日の第二次回章のなかで、学部長は正教授会に、「(「資産数千グルデン」を自ら申告した者をも含め) 今回の候補者たちに、彼らには将来年俸の支給を請願して大学や学部負担をかける意志がないことを、念書 (Requisit) によつて約束させるべきかどうか」といふ問題についても判断を求めてゐるのであるが、その際、「候補者たちは、念書といふことに相当不快を感じてゐる (sauer dazu sehen) やうだから、この念書がどうあつても必要といふのでないなら、念書の要求はしないで済ませたい」と私見を述べてゐる。正教授の殆んどはこの問題に應揚であつたが、最長老のズッコフ教授 (Johann Lorenz Daniel Suckow, 1723~1801) だけは、今後を正しく洞察してゐた。「生活問題で年俸を請願して来る候補者があつたら、それはチュービンゲンの博士殿ただひとりに違ひない。他の候補者が大学に負担をかけぬであらうことは断言してもよい。ヘーゲル氏が申し立ててゐることは満更偽りでもないや

うだが、いづれにせよ、大学に他日様々な要求を持ち出してくることがないやう、彼は「念書などによつて」義務づけられるべきである。」——この豫言は餘りにも正しすぎた、「他日」どころか、公開討論会のその前日に、もう早くも的中したからである。

三一六 八月二十六日。この日、午前五時、前掲のズッコフ教授が急逝した。何かと慌しいこの日の哲学部に、ヘーゲルは（彼自身も多忙を極めてゐた筈であるが）第三次請願書を敢へて提出する。「……この請願書には講義題目の掲示用草稿を同封いたしました。その草稿にはまた、愚生が聞き及んでおります・序列オレトゾクの問題について、愚見を——即ち、貴学部オノガクの学則に従へば、私講師名が講義目録に記載される順序は、本人が公開討論を済ませた順番に従ふ、と解釈される旨を——記入致しました。明日、御指定の時刻に出頭致しますので、この問題への御判断を頂戴出来ませれば、誠に有難く存じます。」つまり、自分は、二十八日、二十九日にそれぞれ討論を行ふ他の二候補者よりも、一日ないし二日早く討論を済ませるのであるから、講義目録においても他の候補者よりも先に「先任者として」記載してほしい——さういふことを、彼は哲学部の学則の解釈を根拠にして願ひ出たのであつた。そしてキムメル博士の分析では、ヘーゲルはまさに現行学則の不備ないし盲点を衝き、学則中の類縁条項を援用して、将来、年俸を請願する機会オキケが生れたとき、少しでも有利に事態が運ぶやう、この時点において既に地歩を固めようとしてゐたと見られるのである。さうだとすれば、そこには、他者における・ただ一瞬の隙すまもただ一点の短欠も見逃さないやうな伶俐さが、又、すべてを自分の勝機に結びつけようとする・非情なまでの攻撃性が、隠顕してゐるのではないであらうか。のみならず、吾々はここで確かにひとり、個性に——自分自身も実存の根底から揺れ動いてゐるのに、否、それ故にこそ、外そとをかうも激しく攻め立てて辟易させてゐる渾沌不透明な生に——出逢つてゐるのではないだらうか。さて、ヘーゲル博士からの無理難題（Ansinen）に接した学部長は、前任教授ゼネオラトヘニングス氏（Justus Christian Hennings; 1731~1815）に意見を求め、この人の意見書を添へて、第四次回章を發出した。ヘーゲルが請願して来た問

題については、学則に明確な規定がなく、慣例ではどうなつてゐるかを先任者に尋ねる必要があつたからである。先任教授の判断は然し、先例に基いてといふよりは寧ろ常識に従つての判断であつた。

——ヘーゲル氏の望む所は、秩序にも正義にも反してゐる。先づ、他の二候補者は彼よりも先に資格論文を、しかもテーゼではなく資格論文全体を提出してゐる。そして第二に、他の二候補者は今週はずつと公開討論のために待機してゐて、いつでも討論に応じうる態勢にあつた。しかも、その中のS氏は前々から、自分に先任講師たる権利がある、と申し出てゐるのである。……もしヘーゲル氏が吾々の考へ方に従はうとしないなら、学部長は、部長権限で、明日および明後日を他の二候補者の公開討論日にて、ヘーゲル博士には土曜日（二十九日）を割り当てておくべきである。——この覚書に快哉を叫んだのは学部長だけではない、すべての正教授が完全に同調したのであつた。

「たしかに学則では、教師 (Magister) および助教 (Adjunkt) の序列は、討論終了の順番に従ふ、と定められてはゐる。しかし他の二候補者 (S氏およびP氏) はヘーゲル氏よりも先に当国の博士 (Magistri nostrates) となつてゐるのであるから、今の場合、序列について論争の餘地はない。」S氏たちが既に資格論文を提出してゐるのにひきかへ、ヘーゲル氏は自分の論文に未だ取り掛つてもゐなかつたのである。<sup>(37)</sup> 同氏はただ特例によつて開講を許可されるのだから、講義目録においてS氏たちの名が彼の上位に来るのは当然のことである。私案であるが、三候補者の討論がすべて終了する土曜日にはじめて、三人に開講権を与へることにしてはどうか。等々。——これらの反応の中には、(無理難題を) 断乎拒絶する者の、但し多少冷静さを失つた正義感が認められるやうに思はれる。(若しも真実、「私講師の序列を決定するものは、学位取得の順序でも資格論文提出のそれでさへもない、公開討論を実施した順序である」<sup>(38)</sup>といふのであれば、ヘーゲルが請願する所は、少くとも形式的には可能だからである。)

然し、この青年哲学者は更に、別の手続き問題でも(尤もこれは彼のほうが学則に違背することによつて) 正教授たちの神経を逆撫でにしてゐた。即ち、「討論資料たる資格論文(彼の場合はテーゼ)は、候補者本人が正教授のひ

とりびとりに届けるべきであつて、応答者などに届けさせてはならない」といふやうに学則に定められてゐるにも拘らず、正教授たちの口吻からすると、ヘーゲルは少くとも二、三の教授には餘人に届けさせたことが推定されるのである。「学則がこの点においても遵守されるやう、私はどこまでも主張したい。もしこの博士殿が私に論文を送つて来たら、私は彼にそれを突き返して、自分の義務といふものを彼に気付かせてやらう。」——前学部長のこの劍幕は、さすが正教授たちも頭に血が上りはじめてゐたことを示してゐる。いづれにせよ、これまで、この候補者の攻勢のまへに只管讓歩を重ねてきた正教授会は、やうやく最終段階に到つてはじめて、いはば断乎たる「否<sup>ナイ</sup>」を以て報ひえたのであつた。

しかし、この「ゼロ回答」を彼が受取つたのは既にその翌日、即ち公開討論会の当日のことであり、同時に彼三十一歳の誕生日のことであつた。この公開討論会については、哲学部の公式記録が応答者および反論者の名を列記してある以外に、殆んど資料がない。(注(31)参照)然し、公式参加者の大半が同郷のひとであり、また候補者が来場者に式辞および謝辞をラテン語で語りかけるやうな、さういふ雰囲気の中で、すべては滞りなく終了したのであらう。そのあと、学部長は口頭で、候補者に開講の許可を告げたことと思はれる。だが、恐らくその際、同時に告げられた管の・かの拒否回答について、彼は何ごとを、あるひは抑々何かを、学び得たであらうか。餘りにも昂然たる彼のあの弱気はどのやうに反応したであらうか。(注(48)参照)

三二七 それとはともかく、かうして事態は、資格論文の提出および仮講義の実施といふ・最終の、段階に向つて動き始める。然し、討論の折にその表題が公示された所の、『遊星軌道論』そのものは、一向に提出される気配がなかつた。公開討論の当日までは哲学部に頻りであつた彼の登音も、やがて跡絶<sup>とだ</sup>えた。いつしか九月は過ぎ、十月も半ばとなつたが、未だに論文は提出されない。彼は哲学部への公約を忘れてしまつてゐるのだらうか。——

所が、大学の外では却つて、この新任私講師の名が、屢々教養人士の口の端にのぼるやうになつてゐた。九月十五



日および十六日の『エルランゲン文学新聞』には、ブーテルヴェークの著書への書評が現はれる。更に、九月末(?)から始まつたミヒアエーリス書籍見本市の新聞書目録には、かねて印刷中と伝へられてゐた著書の表題(「差異性」)が見出される。シェリング自身、刷り上つて来たばかりのこの書物を傍に、フィヒテに対し、十月三日付けの書簡において、自分と彼フィヒテとのあひだの哲学上の相違点を説明するのである。<sup>(40)</sup>然し、世間には又、シェリングが故園から屈強の戦士を迎へ、フィヒテでさへも自分の学説には遠く及ばないのだといふやうに公衆に宣布させてゐる、と評する向きも出て来た。<sup>(41)</sup>そして、大学の外での彼のこのやうな活動ぶりと、それへの世間的反響とは、大学の内にも伝はつて来るのであつた。いつたい、彼には資格論文を提出する意志があるのか。要するに、このひとも亦シュレーゲルの同類ではないのか。正教授たちにおいて、彼に対する先日来の感情が、疑心に転じ暗鬼を生じたことは、十分考へられることである。

十月十八日、哲学部長は先任教授ヘニングス氏から一通の書状を受け取る。――

「ヘーゲル博士が資格論文を未だ提出してゐない、といふことは、私は存じませんでした。提出するとばかり思つておりましたからこそ、公示用の題目草稿についても同意したのであります。学部長殿は、ヘーゲル氏に、資格論文を提出し終へるまでは開講することが出来ないのだ、と通告する権限を、職務上 (vermöge ihres Office) 持つておいてです。……私が彼を出頭させようとしたら、彼は定めし食つてかかるでせう――先生は私に命令することが出来るのですか? 先生は学部長なのですか?」――と。さうなつてはいけませんから、学部の名において (im mine facultatis) 「彼の開講を」禁止し、彼に、遺憾ながら学部の結論 (das Conclusum) をお伝へするの已むなきに到りました、と、さう告げて下さい。……

どうか遠慮されずに、ヘーゲル博士の講義題目を掲示板から取り除いて下さい、どれもこれも吾々を欺いて手に入れたものですから。<sup>(42)</sup>――この文書は、学部の公式記録や学部長の回章、正教授の判定などとともに、今日までイェ

一ナ大学哲学部に保存されてゐるのであるが、正教授会の（少くとも先任者における）憤怒の凄まじさを、歴歴ありありと写し出してゐるやうに思はれる。

然し、幸か不幸か、振り上げられた拳は振り下されず、学部長権限は発動されなかつた——丁度この同じ十八日の日、資格論文『遊星軌道論』が提出されたからである。まさに危機一髪であつた。次いで翌十九日、ヘーゲルは仮講義を行なつた。公式記録は学部長および五人の正教授（その中には前記の先任教授も含まれる）の臨席を記入してゐるのみである。資格試験において仮講義が占める比重は、既に見て来たやうに、かなり大きいものであるが、その内容については、列席正教授の名前以外に（表題さへも）知る手掛りはない。恐らく、これも亦、特に記録すべきこともなく、ごく普通の仮講義として終了したのであらう。そしてヘーゲルには、仮講義の出来栄を振返つたり、正教授会の・自分に対する感情の好し悪しを付度そなへするやうな餘裕は無かつた。<sup>(43)</sup> 盟友シェリングを筆頭編輯者とする『哲学評論』の企画が、この頃、シェリングとコッタ社との間で進捗してゐた。既に共同編輯者に豫定されてゐたヘーゲルにとつて、十一月、初めに置かれた・創刊号への寄稿期限は、万鈞の重みを以て迫りつつあつたに違ひない。<sup>(44)</sup> かうして、次の事実聯関（即ち論評活動）の始動と交錯するやうな仕方において、資格試験といふ事実聯関は完結したのである。経過が屢々難航し紛糾したのに比べると、幕切れはまことに呆気なかつた。

素志を実現し得たヘーゲルは、この冬、学外では『哲学評論』を刊行し、学内では「論理学および形而上学」を開講する——奇しくも、先任教授殿および前学部長殿と同じ講義題目であつた。<sup>(45)(46)</sup>

#### 四 理念的聯関への移行と批判的反省

四一— 吾々はこれまで、資格試験そのものを媒辞とし当事者を両極とするやうな推論關係を、その實在的聯関において解明しようと努力して来た。具体的には、キムメル資料をはじめとする第一次的資料を中心に、この聯関の

純粹描出を試みて来た。ここにその媒辭が周延し實在的聯関の提示が完結したのであるが、さうとすれば、そこからどのやうな描像が「一八〇一年夏のヘーゲル」として現前してくるであらうか。そこに髣髴として来てゐるのは、どのやうな人物像であらうか。

(1) イエーナ時代を通じて（特に、来住して未だ間もない初期において）、ヘーゲルを根底から制約してゐたのは、生の昏さであり渾沌であり、また生の未熟であつた。精神的生の動向さへも、この昏さに制約されてゐた。たしかに彼の精神的生は、生涯の志を果すべき・乾坤一擲の戦機を迎へて白熱した。然し、この精神的生の全体が（——それは自分の体系の構築へと向ふ求心的意欲と学界言論界に乗り出さうとする遠心的志向との、このふたつの意欲方向の交錯であり競合であつたが——）いつでも無に帰しかねない可能性なのであり、そのことを、彼自身が誰よりもよく知つてゐたに相違ない。志が若し成らなければ、故山の地に帰つて牧師になる可能性も、全く考へないといふわけにはいかなかつた。

彼は殆んど徒手空拳でイエーナに移つて来たのである。携へてゐた「資産」<sup>ヴェルメイルン</sup>にしても、生活を当座支へうる程度のものでしかなかつた。また、学に志してから十餘年、孜孜として蓄積して来た研鑽の成果も、未だ殆んどが一人の範圍に留めおかれてゐた。即ち、所謂「業績」に相当するものが、彼には何ひとつなかつたのである。斯く無名であり社会的には全く無力である彼にとつて、頼り得るものとしては、ただ自身自身の精神的生に内在する力、つまり自力があるのみであつた。学究として生き残るためにはすべてを非情に手段化せざるをえず、素志を遂げる機会<sup>チャンス</sup>であるならばどんなものでも捉へねばならなかつた。資格試験全体の経過のなかで頭はになつてくる・彼の性格的なもの、言動における特異なるもの、は、さういふ実存的状況の表現として理解すべきものであらう。

既に具さに分析して来たやうに、この頃のヘーゲルの言動は、重要な問題についてのものがまさに屢々、不透明であり、前後に撞着しきへしてゐる。そしてそれらを通じて吾々に先づ印象づけられるのは、彼の飽くなき攻撃性であ

り、厚顔 (Verwegenheit)<sup>(48)</sup>と紙一重の・強<sup>したた</sup>かな自己中心性であつた。實際上門限が過ぎてゐるのに、駈けつけて執拗に彼が食下つてゐたのは、義務の遂行に先立つて権利を与へよ、といふ要求であり、しかも、義務をすべて果してゐる他の候補者よりも、特例により義務を軽減された自分のほうを更に優先せしめよ、といふ追討ちであつた。——然しながら、この「攻撃性」を更に仔細に吟味すると、到る処に人間的な旋びが現はれてくるのである。哲学部の或る学則の中に不備を見出して、そこから自分に都合な解釈を導き出すほど抜目なく恰愾であるのに、また、別の学則はまるで見過<sup>みま</sup>し、結局は正教授会の心証を益々悪くする、といふやうな手抜かりの一面もある。たしかに、彼の昂然たる覇氣に自信過剰の反面があつたことは否めないであらう。何しろ、資格論文(三十二頁、ラテン語。一八八頁参照)を、二百四十二頁の書物の書評とともに、旬日のうちにほぼ仕上げようと企図してゐたのであるから。しかも彼は現実には、この論文を提出するのに、書評の仕事を片付けて両手が自由に使へるやうになつてからでも、更に七週間以上を要したのである。それが彼の積極性・攻撃性の即且対自態なのであつた。——

だが、それにしても何といふ人の好きであらうか。完成してゐなくとも書きかけの紙束(資格論文の草稿)を提出するならば、それは何かになる、といふふうに彼が信じてゐたとすれば! たとへば、自分がそのやうに精一杯誠実に資格試験に対応してゐることを示せば、哲学部の諸教授も亦感応し、この誠意を人間的に評価し、駈けつけ受験の無理も何とか配慮して貰へる、と信じてゐたとすれば! 然しその場合には、誠意が誠意を、精神が精神を、必ず喚起し勧請するやうな構造の世界(共感的世界)を、自力以外に前提してゐるのであるから、彼の攻撃性は最早不遜のそれではないであらう、寧ろ機縁に従つて攻撃的に活動してゐる精神的生のそれであらう、つまり、根源的不安における・精神的生のひとつの実存的企投と理解すべきであらう。

(2) もちろん、不遜の影すら見当らない、とまで弁護するのも、却つて行き過ぎなのである。——イエーナに來住するにあたり、ヘーゲルがシェリングの陣営に身を投じたのは、言ふまでもなく、このひとが多年、純粹に真心を以

て自分といふ人間を理解してくれたからであり、また世間への発言力影響力においても頼もしい友人であるからであつた。<sup>(49)</sup>彼は豫て共感を覚えてゐた・この友人の哲学と更めて取組むことになるが、折柄創造活動が最高潮に達しつゝあつたこの友人の思想に、彼はどこまで自分を滅却して没入し徹底することが出来たであらうか、ないしは、彼に本来の思惟方向によつてそれをどこまで自己棄籠中の物となしえたであらうか。——だが、いづれの可能性もその極を究めるだけの餘裕のないまま、彼は早くも自分の哲学的立場を鮮明にする必要に迫られた。それと同時に、ヘーゲルは、一陣営に帰属したことへの代償として、元来はゆつくり仕事を進めてゆくたぢであるにも拘らず、期限を切られた仕事に次々と引曳りこまれる。かくして『差異性』論文に始まつて、『エルランゲン文学新聞』『哲学評論』といふやうに、息を継ぐ間もなく、執筆、寄稿、企画、共編等々の仕事が殺到する。それへの応接の相間を縫ふやうにして、彼は教授資格を取得しようとした、彼の生涯計画のうへからいへば、寧ろこのほうがこそ最重要の関心事でなければならぬにも拘らず。——

その結果、彼は不本意にも、外部からは、シェリング陣営の闘士（要するにアンヘンガ流）と見做されるに到つた。彼自身における・不敵なまでの独立性の意識は、それには激しく反撥したけれども（二六九頁および注(4)参照）、その意識自体は未だ思想の洗練された表現と構成とに達してゐない。従つて彼が差当り公開する思想は、シェリングの原理に基いた理念的実体の立場と、彼に本来的な精神的生（主体性）の方向、といふふたつの・相互に独立な思惟聯関の、その交錯となり混淆とならざるをえなかつた。<sup>(50)</sup>未だ咀嚼し切れず消化し切れないものをそのままに、早くも公表してゆかねばならないのが、論評の場に立つものの現実であつたからである。それ故、論述の混雑は、生のさういふ昏さに制約された・精神的生の昏さにほかならなかつた。この思想的渾沌を本来あるべき方向へ向けて闡明しなければならぬ、といふ衝迫が、彼には、学的体系を構築する課題として、重苦しく意識せられてゐた。<sup>(51)</sup>——このやうに、問題意識に追跡されるとともに、文筆活動の悪無限的循環の中へ早くもめりこみつつあつたヘーゲルにとつて、制度と

しての資格試験、そしてこれを実施する社会組織としての大学等々は、どこか軽く見えてゐなかつたであらうか。「文士たちの饗宴」<sup>ザウスマ</sup>に加はつて其所から樸学の府を顧みたととき、彼の目差は何かシュレーゲルのそれと通ずるものになつてゐなかつたであらうか。資格試験に臨む彼の姿勢のうちに、高を括つてゐるやうな節が全然なかつた、と言ひされるであらうか。

(3) それ故、この青年哲学者を、ただ単に好奇心の、ないし非歴史的反省の、その対象として眺めやるだけならば、彼のあまりな自己中心性は屢々、いかにも堪へがたいものに感ぜられるであらう。キムメル博士によれば、一八三五年に公刊された・或る『近世人物評伝』には、次のやうな記述が見いだされる、といふ。——「ヘーゲルは、フィヒテから貰つてゐた粗悪なルイ金貨で、資格試験の費用を支払つたが、全く滑稽なことだ。その哲学は、いつも粗悪な貨幣のある所にあつたが、しかも、哲学部をなほも嘲つて挑発するほどにも凶々しかつたのだ」——たしかにこの記述は、彼の資格試験の表面的経過が、当時、局外者の眼にどのやうに映じたか、その一端を窺ふうへで興味深い資料ではあらう。つまり事態の皮相しか見えない者は、ヘーゲルの言動に対し、かういふ誤解と悪感情とを懐きかねない、といふ・彼が実際に直面してゐた危険の可能性をば、それは例証してゐるのである。そして、ヘーゲル自身も亦、日常的世俗的な、また社会的制度的な實在聯関において、自分の生が、見る見るうちに毀譽褒貶の渦の中へ巻きこまれてゆくことを体験せねばならなかつた。彼の攻撃的態度が實在聯関の中に生み出したものは、同じ聯関をつたつて反撥を呼び戻した。彼が資格試験を通じて正教授会の中に播植した悪印象は、種子から毒麦にまで育ち、その穂先は、イエーナ在任のあひだ屢々彼を傷つけ且つ屈折させるのである。(注(4)参照)あるひは、家庭教師といふ孤独な生活の中から折角飛びこんだ「文士たちの饗宴」も亦、「精神的動物」(才能に生きる個人)の相互欺瞞が循環する悪無限的實在聯関にほかならないこと、それは、はるかに客観的な、「昨日今日成りいでしもの」には非ざる何ものかに比べれば、片隅の私的なものに過ぎないこと——さういつたことを、いまヘーゲルは学び始めつつあるのである。彼は言

はば閉された書齋から突如拉致されて、世間といふ大きな書物を速読させられてゐるのであつた。

しかし、吾々がここまでこのひとを見つめてきた目差は、世間が彼を見た目でも、また彼自身が實在聯関に没頭し世間の目とひとつになつて自分自身を見た目でもなく、まさに理解の見であつた。それ故、吾々は彼の言動や性格を倨傲不遜と徒らに裁くやうな構子定規には関与せず、それらは、昏きにをり不透明に居る精神的生の（その実存的企投の）表現である、と理解したのである。ゲーテはシラーに宛てた書簡の中で、ヘーゲルのことを「これは全く卓越した（vortrefflich）人物です。しかし、自分の考へを言ひ表はすのに餘りにも悶へすぎで、なかなか適切に言ひ表はせないでゐます。」（一八〇三年十一月二十七日）<sup>(54)</sup>といふやうに評してゐる。この評価は、ヘーゲルのイェーナ在任中渝ることがなかつた。二十一歳も年上で・しかもザクセン・ワイマール公国の宰相たるこの文豪がそこまで見抜いたのは、勿論、本質直観の天才によつてであつて、彼が同時代の實在聯関と實在的にひとつでありえた（つまり同時代の俗眼となることが出来た）からではない。いつぼう吾々は、同時代性といふやうな「利点」を持たないけれども、後の世に生きて・追理解を遂行し得るといふ可能性の故に、（本質まで直観しえないにしても）少くとも、かの時代の、實在聯関に埋没し俗眼そのものに頽落する可能性は、文豪と同様に超出することが出来るし、現に超出出来たのである。換言すれば、吾々は、實在聯関を既に超出してゐる所の何ものかを、豫め理解してゐる、そして、この先行理解に先導されて實在聯関をそのつど照明しつつ、理解の見を遂行して来た結果、此処で遂に、實在聯関に埋没した俗眼を批判的に却けうるやうな段階にまで到達したのである。然もそこには、ある決定的で根源的な事態が端なくも開示されて来てゐるのではないだらうか。

四一― (1) ここで根源的な事態といふのは、先づ差し当つては、伝記記述ないし個人史理解における・最終で最高の循環がそこに開示されてゐる、といふ事柄を指してゐるのである。――吾々は、本稿においてこれまで、資格試験における彼の実際（迂餘曲折）を見極めるために、第一次資料に基いた純粹描出を試みて来た。具体的には、この推

論式の兩項および媒辭のひとつひとつを、さういふ資料に基き、専ら實在聯関において周延し、そこから事態の眞実を純粹描像として浮び上らせようと努力して来た。それは吾々が眞に *reality* でありうるためである、換言すれば、時間が齎す忘却や忘恩から、又、(後世のそれらは勿論) 生前既にうづ高く築きあげられた偏見や神話や虚像からさへ、眞に自由になるためである。たとへば、偉大な恩師の声貌がなほ日々に新たにあり・師の学説の迫力に今も満たされつつあつた使徒たち(「故人の友の会」)のその諸判断からさへも自由になつて(つまり自分自身の先行判断とすることなく)、しかも、成らうことならへーゲル自身の息吹きが感じられるやうな、さういふ場所にまで進むためなのである。――

(2) しかし、その結果吾々が到達したのは、たしかに、同時代の「生レビッの・生レビッしい鼓動が、たとへばへーゲル自身の自己中心的な要求やそれに対する同時代人の反感・憤怒・非難などの声が、今にも聞えて来さうなほど現実的な、さういふ埃つばい状況ではあるであらう。つまり、同時代の俗眼そのものがそこで成立し且つ存立したやうな實在聯関であり、この聯関の果てしない広がりではあるであらう。とはいへ、先程来吾々が目標にして来た純粹描像とは、同時代のこの俗眼に映じてゐたやうな人物像を意味するのであらうか、また吾々が試みて来た純粹描像とは、さういふ人物像の復原を意味するのであらうか。いや、断じて、断じて、さうではない。

事態の眞実といふものは、後世に対すると同様、同時代に対しても隠蔽されてゐる、ないしは躰きの現実的可能性としてのみ現出してゐる。體驗的聯関において感性的ジエンリッヒに一義的に現前してゐることが却つて同時代人には過誤への陥穽となる。「誰か同時代の者が敢へて崇高な行ひをしたときは、これを虚榮の動機から、といふやうに見做し、もう死んでしまつた人々の同じ行為については、立派であつた、と考へる」のが吾々人間の常なのである。<sup>(56)</sup>「へーゲルがこんなにも偉くならうとは考へて見たこともなかつた」と、彼の同期生たちは驚き怪しんでゐた、といはれる。<sup>(57)</sup>即ち、純粹描像をただこの方向に只管探求したのであれば、吾々は微行マイクロニテの中の眞実像を遂には群集のうち日常性のう



ちに全く見失ふだけであつたであらう。たしかに、時間的な隔たりをただ一途に溯つていつて原型に達しようといふ復原志向は、空想や政治的意図などによる神話伝説の類から吾々を多少とも自由にするであらうが、しかし、それだけであるならば、(根源の開示に豫め先導されてゐないならば)、吾々の眼は精々の所、物欲しげな眼から「僕婢ども」のシニカルな眼に転化するに過ぎない。そしていづれにせよ、感性的なものに執着して實在聯関の中を果てしなく彷徨せざるをえない限りにおいて、等しく「俗眼」なのである。聖者や英雄や未来社会を待望するものも、さういふ待望が生み出した神話を政治的に利用するものも、そして更に、或る人格の・私室私宅での振舞ひが彼の真実そのものである、と断定するのも、いづれもその根底に感性的ないし感覚への盲信が存立してゐることは明瞭だからである。

(3) 他方、時間が経過し・時代的な隔たりが拡大することによつて、却つて、同時代の虚構が剝離し、根源の真実に近づく可能性が一層増大することも確かである。会戦の推移を把握し・その帰趨を豫測し得るのは、白兵の下に死闘を繰返してゐる最前線の将卒よりは寧ろ、帷幄の参謀であるが、それと同様、体験聯関を時間的に遠隔つたときからはじめて、ある歴史的な事柄の中に含まれてゐる本来の意味が現出し得るのである。「ある歴史上の事柄は、それはもはや歴史的関心をしか惹かないほど十分に死に切つたときにはじめて、客観的に認識することが可能になる。……主観的関心の排除といふことは、このときにはじめて可能になる。」——しかし、このやうに、かの復原志向とは逆の方向へ進む(即ち時間系列を降る)ことによつて、はじめて現出して来るこのものは、實在聯関からは独立した・或る対自的聯関に属してゐる。それは体験の生々しさから離隔することにおいて愈々、従つて、感性的なものが止揚されることによつて益々、明瞭確實になつて来るやうな意味的内容であるからである。吾々はこの意味的形象について、それらは、實在聯関の悪無限から(つまり俗眼の空しさから)独立し・ひとつの聯関を形成する限りに於いて、理念的聯関一般に帰属する、といふふう言ひ表はすことが出来よう。そして、理念的聯関のさういふ理解は、次のやうな一種の逆説として形式化出来るのである。——「時間的に遠いもの(過去)に近づくためには、時間的にいよ

よそこから遠ざからねばならぬ、またそのやうに時間的に遠ざかることによつてしか、この遠いものには近づきえない。」あるひは、「過去における現在（同時代）に到達するためには、その現在にとつての未来の方向に離れねばならない。」——

(4) だが、それでは、あの純粹描像は、この理念的聯関の対自化を極端にまで押し進めることによつて、つまり實在聯関から完全に離絶し・また實在聯関を完全、完全に忘却することによつて、吾々の掌中のものとなるのであらうか。——しかし吾々は、理念的聯関一般についての全体的且つ具体的論明はここでは省略し、ただ伝記記述ないし個人史理解に關係してくる限りにおいて、この問題を究明するにとどめるほかはない。——さうすると、先の形式化に對して、その後続部分として次のやうな補足が必要になつて来ることは明らかであらう。「然し、時間的に遠いものから（現代の方向へ）そのやうに遠ざかることは、その遠いものへ近づいてゆくことを目指した運動であるべきであり、この目標によつて常に制約されてゐなければならない。」もしくは、「然し、過去から現在へ降るのは、その過去にとつての現在に還るためでなければならない。」——といふのは、さもなければ、純粹描像とは、實際には、後世におけるある特定の時代の尺度（たとへば、当代の流行觀念）をそのまま絶対化することによつて構成され・而も實在聯関から全く離絶してゐるやうな、さういふ形象を意味することにならうからである。そこに描出されてゐるのは、プロクルステスの宿で寝台の長さに合はせて裁断された旅人のやうに、血の通はない・純粹に理念的な被構成体であり、實在してゐたものへ着せかけられた経帷子なのである。さういふ像の实例を、吾々は、独善的独断的世界観における白々しい人物批評から、いくつでも欲するだけ引き出してゐることが出来る。——然しながら、いかに純粹であらうとも所詮は昇きいださるべきこの類の形象から、吾々は生きたもの實在してゐたものの聯関のほうへ、しかも同時代に附着してゐた埃や塵を洗ひ流して瑣瑣しき清清しさのうちに蘇つて来た實在聯関のほうへ復帰しなくてはならない。寧ろ、實在聯関へ復帰してくるやうに、その實在聯関によつて本質的に制約されてゐるのが、理念的聯関の對

自化なのであり、さういふ媒介関係への理解が、ここまで吾々の理解を常に、そのつど先導して来てゐるのである。従つて、吾々の理解は、循環する全体のなかで解明を遂行してゆく構造のものに他ならなかつたのである。

(5) この循環運動は、「過去のものに近づくためには、そのものに近づくことになるやうな仕方だ、そのものから遠ざからねばならぬ」といふやうに、逆説的形式において、印象的に表現することが出来る。しかし、この循環は論理的パラドックスといふよりは寧ろ解釈学的なものである。といふのは、この運動の両極たる实在聯関および理念的聯関は、存在的にも存在論的にも互ひに他に対して独立してゐるが、運動はそれらを貫いて時間の方向に、そして逆の溯源的方向に、しかもこの両方向が統一ある全体をなすやうに往還するのだからである。のみならず、第二に、实在聯関そのものが、この運動を通じて、感性的個別的なものの果てしない埃土から、普遍的で然も具體的個性的なものの聯関にまで、存在論的にいはば変容して（いつそう深い根底から見えるやうになつて）あるからである。

だが、吾々における・この理解の見は、自分自身をこの循環の只中ただなかに投じ・その運動をみづから現実に遂行するよりも前に、（さうしなくても）既に自分の循環構造全体を直観してゐるやうな、さういふ能力の主体では決してないのである。換言すれば、人間的な理解とは、この運動の或る特定聯関から着手して特定の方に挺身し、この「必死（a corps perdu）」の先投により他の独自聯関を対目的に言はば降臨せしめつつ、それを通じ・やうやく最後になつて、循環全体の開示を（それも徐々に）受取るに過ぎない控へ、目な活動である。それは、自分を先導し・その都度照明してゐるものを、真なる觀念イデアとして豫め直観し、そこへ向けて自己を方法的に教導してゆくことが出来るやうな、さういふ能力では断じてない。そのやうに、遂行したあとではじめて、その遂行に先行して照明してゐたものが見えてくる、といふ所にその本質規定が成り立つ点で、理解はまさしく有限なのである。——然し、そのやうに有限ではあるけれども、この循環の反復をみづからの意志とするならば、理解に対し先行してゐたものが、広さと深さとを増し加へながら少しづつ、明るみの中に現出してくるのであり、その限りにおいて、理解は単なる自然的实在

聯関を既に超出した可能性である、即ち自己を訓練し陶冶し構築する可能性であつて、精神的生そのものに帰属してゐるのである。

(6) それ故、このやうな理解の目差(まざし)によつて摸索されてゐる・純粹描像と真正の伝記記述(トイオグラフィ)とは、当然、精神的生を表現するものであるし、また表現しなければならぬ。——尤も、「精神的生」といふ概念は、ここでは伝記記述を可能にするための・解釈学上の根本的制約を意味してゐるのであつて、哲学史上の様々な独断的形而上学やあるひはあゝる種の生の哲学などにおける意味内容からは全く自由であることに注意する必要がある。——現実に実在し・或ひは実在した個々人は、ディルタイ風に言へば、諸々の生聯関の交叉点(Kreuzungspunkte)である。諸々の実在しないし理念的聯関が、この個人の中をつぎぬけて自体的に存在し、また自己立法的に展開するのはたしかであるが、然し他方、個々人は自己の心的構造において、これら諸々の生聯関を結合し、更にそれに自分独自の理解を加へて表現するところの、生の統一単位(Lebenseinheit)でもある。即ち、彼は、實在的聯関(心的・心理的・私生活的聯関のやうに内面的非外形的な聯関も、社会的歴史的聯関のやうに公開的物象的なものも、いづれもこれに数へられる——)のその惡無限的な形而下的の広がりとして、これを超出した理念的意味的聯関(たとへば、学問・芸術・道徳・宗教など)とを、全く異域別個の聯関であるにも拘らず、心的構造(psychische Struktur)を通じ、内面において結びつける能力であり活動である。自然的聯関の中には決して見いだすことの出来ぬ結合が、心的作用を通じ個人において実現してゐるのであるから、彼の中でさういふ結合を可能にした・生の根源(この結合を創出した・生の統一)は、「精神的生」と言ひ表はされるのが一番相応はしいであらう。この精神的生が自分自身を、渾沌とした昏さ(ないし途上の可能的な青さ)から秩序ある明るさ(つまり理解の可能性が最も遠くまで開けてゐるやうな地平に)齊すその過程(陶冶)が、伝記記述の主対象なのであり、理解の眼に見えてくるものなのである。

但し、理念的聯関も亦、それが、精神生活と普通に言はれてゐるものの基礎にあり・且つ實在的聯関に、対し、独自の

聯関をなしてゐる限りにおいて、同様精神的生と言ひ表すことは可能である。だが、先程以来吾々がこの言葉のみに理解してゐるのは、寧ろ、それぞれに独立な生の諸聯関を心的内面において結合するところの、根源的生であり、従つて實在的聯関に対しても積極的に関与し・これと理念的聯関との統一を創出するやうな、それ故、これを自分の循環運動の契機たらしめるやうな、さういふ<sup>トタル</sup>全体的な生聯関であつた。——然し、このふたつの理解の間には撞着も用語の混乱も存しない。實在的聯関との対立において際立つてゐる限りでの理念的聯関と、前者と結合して根源的統一の一契機となつてゐる限りでの理念的聯関とは、實質的には同一であり、ただ、同じ循環運動が自分の中で意味を深めつつあるだけ、ないしは、自己をして異なつた役割を遂行せしめつつあるだけなのである。

然し、このやうな統一的「精神的生」は、あくまでも、理解が課題を遂行するための、また理解せらるべき（たとへば伝記記述の）対象の、その（解釈学上・存在論上の）根本制約であつて、イエーナ時代のヘーゲルの精神的生が創造しつゝあつた・彼に本来的な理念聯関からは、即ちひとつの形而上学的立場としての「精神的生」からは、最も微妙且つ截然と區別されねばならない。といふのは、このふたつの精神的生は、吾々解釈遂行者の立場から一言を以て蔽ふならば、根源的生とそれに限定された表現といふ關係にあるからである\*。

\* 彼自身の学的立場としての、「精神的生」（ないし「主体性」）は、論評期（二八〇—二八〇三）には未だやつと、混雜した抽象的な段階にしか、つまり、（シュリング的な）理念的実体の立場など別種の思惟聯関と混在して互ひに來雜物となり互ひに互ひの理解を妨げあふ程度の域にしか、到達してゐなかつた。（一七三頁および注（50）参照）だが聽てこの立場は、他の思惟聯関を自己内に契機として、悉く止揚する方向で、さういふ混沌混迷を脱却し、かくして理念的聯関として純化し、自己が体系構築のための唯一真實の基礎であることを証示するのである。その間の哲学的推移、またそのやうな展開の哲学的根拠こそ、熱情的に問ひかけられることを待ち受けてゐる・吾々へのゴードリアン・ノートであるに相違ない。——然し、それは果して、或る学的立場として概念的に表出された限りでの「精神的生」の、その内側に留まり、その概念的表現と同じ次元で・その間にただ形式的ないし哲学的整合性をば見いださうとするやうな、さういふ試みによつて把握し得る問題なのであらうか。寧ろ

吾々は、「精神的生（の立場）」といふひとつの学的立場を抑々成り立たしめた根源的制約（さういふものとしての「精神的生」）にまで一旦溯り、そこから、学的立場における「精神的生」とその推移をも、この根源の生がみづから方向を決定し進路を開拓してゆく活動のその表現として、理解すべきではないだろうか。この生が同時に学的立場の（変容さへも問々含まれる）展開のその根本動因をなすからこそ、後者の運動の各局面も、その都度の切断面においてではなく、前後との一貫性連続性において理解し得るのではないだろうか。――

(7) 吾々は、資格試験におけるヘーゲルのその純粹像を求めて心を砕いて来たが、實在的聯関の解明が一段落したあと、この第四章では、さういふ努力を遂行して来た「理解」そのものの立場とそれを先導してゐた「目差」に、伝記記述の問題を範型として、批判的反省を試みた。その結果、理解作用における根源的事態として、それが理念聯関と實在聯関とを循環しながら内面的に結合してゐることが見いだされた。しかも更に、さういふ根源的循環を抑々可能にしてゐる最高制約として、吾々は「精神的生」に逢着せざるを得なかつたのである、たしかにこの概念の理解に関しては、若干の批判的区別が必要であつたけれども。

それ故、先程は實在的聯関の提示を完結し、今また、それに続いてこの提示作用そのもの（即ち理解）の最高制約にまで溯源したのであるから、吾々は、今や理念的聯関の対自的解明のほうへ取り掛つてゆくやうに、しかも（ふたつの中のひとつの解明が済んだから今度は残りのひとつへ、といふ）實際的な仕方ではなく寧ろ必然的な仕方ですらうするやうに、促されてゐるのである。換言すれば、解釈学的に見たとき、吾々には今や、理念的聯関を實在的聯関への対立において際立たせながら・理念自身の（非實在的）内容をそれ自身において（対自的に）展開させるやうに、といふ・さういふ課題が告示されてゐるのである。然し、それは具体的には、いつたいどういふことなのか。――それは、(1) 彼の資格試験における實在的な過剰曲折の一切を、（恰もそれには全く関心を抱かぬ者であるかのやうに）出来るだけ研究の遂行過程から隔離しておくこと、(2) 彼の資格論文『遊星軌道論』および（それに前提された

『テーゼ』の内容を、もつぱら理論的哲学的見地からのみ批判的に検討すること、(3) そしてその成果に基いて、イエーナ時代の彼の諸講義（特に自然哲学関係のそれら）を今後理解してゆくための妥当な方針を樹立すること、等々が、差当り既に課題として命令されてゐる、といふことなのである。

事態をいつそう直観し易くするために、吾々は今、少し大胆になつて空想の翼をはばたかせ、タイム・トンネルを通つて一八〇一年夏のイエーナ大学哲学部を訪れ、私講師候補者ヘーゲル博士の公開討論の場に赴き、正面にある同氏の発題に、教授諸公・学生諸君とともに傾聴してゐる、と想像して見よう。あるひは、同年冬学期の開講日、午後の日ざしの講義室で十一名餘の聴講生とともに、新任私講師の登壇を待ち受けてゐる自分を仮構して見よう。その場合、吾々が心懸くべきことは何であるか。Auf den Tisch-Klopfen ともに入室して来たこのひとが、旅券に記されてゐるやうに、果して髪は褐色、顔は爪実 (Oval)、目鼻立は普通 (Moyen) 等々であるのかどうか、それを吟味することに気を奪られたり、彼のシュヴァーベン訛りや過多な身振りに掻き廻されて内容の進展に追躡し損ねたり、まして、一部で悪意を以て囁かれてゐる・資格試験の際の迂餘曲折の噂を鵲呑みにして、最初から理解の拒否を決めこんだりすることであらうか？ 勿論絶対にさうではない。およそ聴講する以上、講義の学術的内容の理解に集中すべきことは多言を要しない。従つてこの空想において、吾々に反語的に直覚され直観されてゐるものこそ、まさしく前掲の課題に他ならないのである。——かくして吾々が、イエーナ期におけるヘーゲルの講義活動を、講義内容に即して検討すべき段階に、つまり講義の理念的聯関をして純粹に對目的に語らしめ・それに只管聴きいべき時機に、いまだ達してゐることは明瞭である。その検討は言ふまでもなく、資格論文および『テーゼ』の批判的分析から着手すべきであらう。吾々はそれを次稿以後に、更めて逐次展開してゆくことにしよう。

四一三 「あのひと（ヘーゲル）の講義はおよそわからない (unverständlich) といふ話だ」——一八〇七年頃、イエーナの大学生のあひだには、さういふ噂が相当根強く広まつてゐたやうである。ヘーゲル自身も、イエーナへのさう

いふ噂の置土産を長く遺憾とし、十年近く経つてもなほ弁解してゐるのである——「私は講義を始めたばかりで、徹底的に研究をやり抜いて明晰さに到達する、といふところにまで未だいつてゐなかつたし、口述するときはノートの文字に囚はれてしまつてゐた。」<sup>(64)</sup>——然し本人自身がさう認めてゐるほど難解な講義のその草稿に、吾々はいつたいどこから手を着けたらよいのか。聴講するには聴講したけれども「家鴨か鷺鳥か、いつたい何が論議されてゐたのや」<sup>(65)</sup>さつぱり理解出来なかつた・当時の或る大学生と同様、ただ講義草稿を前に芒芒然とするほかないのであらうか。資格論文や『テーゼ』を理解の糸口にするにしても、この事態にどれほどの改善を望みうるであらうか。——だが既述のやうに、吾々後世を生きる者には、同時代の人々に對比して、数多の特典が与へられてゐる。哲学者自身の爾後の發展や、彼以後今日にいたるまでの・専門的研究の蓄積および哲学的解釈の伝統などは勿論当然のことであるが、吾々がここまで遂行して来た限りでの・实在聯関の追理解（または提示）の中からも、資格論文および『テーゼ』の理解に対する若干の先行理解が生起しており、それらによつて吾々の労苦は著しく軽減されてゐる、そしてそれらの先行理解は、たとへタイム・トンネルを通り抜けて彼の時代へ入りこんだとしても、吾々が吾々である限り失ふことの出来ないものである。それらの先行理解が示唆する所を若干素描して、講義内容の主題的論述（次稿以後）への移行過程としよう。

四一四 「『テーゼ』の理解のために」——(1)ヘーゲルが『テーゼ』の執筆に實際に取り掛つたのは八月十八日以後のことであらう。この日、哲学部から、第二次請願書に対する回答として、資格試験における・特例の適用が伝達されたのであるが、それまでは、彼は資格論文の提出をとにかく積極的に申し出てゐたのだからである。そして、彼が『テーゼ』を学則に適つた仕方<sup>かな</sup>で正教授会に提出し配布したとすれば、それは八月二十三日（日曜日）のことではなればならない。尤も、それには、前述のやうに、若干疑問が残るのであるが（三一四、三一六参照）、然し、たとへ實際の配布が二十三日より一兩日あとであつたとしても、僅々五日・ないし精々六、七日といふ短時日のうちに、彼は



『テーゼ』の内容の構想から始めて印刷の完了にまで漕ぎ着けねばならなかつた。しかもこの間にメールから書評のための書物が送り届けられ、彼はその方をも顧みないわけにはいかなかつた。従つて、構想中の（・開講後の）講義内容を『テーゼ』の形式にまで凝縮結晶させるため、彼が割きうる時間は極めて限られてゐたに相違ない。

(2) 他方、『テーゼ』の正式表題は、学則が指示する所に従ひ、「哲学の資格論文『遊星軌道論』」に前提されてゐる諸「テーゼ」といふやうに掲げられてゐるが、「前提されてゐる (praemissae)」といふこの語は屢々誤解を生んで来た。——といふのも、この語を嚴格に論理的な意味に理解するならば、ひとは、『テーゼ』が、天体力学を基礎づけてゐる・自然哲学上の根本命題から（少くとも大半が）成り立つてゐる、と期待せざるをえないのであるが、然も『テーゼ』の中に実際に見いだされるのは、論理学、形而上学、実践哲学に関する思弁的命題が殆んどだからである。（但し、筆者には第三命題も亦自然哲学に算入出来るやうに判断される、ローゼンクランツはもとより、キムメル博士もグーリガ氏も、自然哲学に属するのは、ただ第五命題だけである、と理解してゐるけれども）<sup>(66)</sup>それ故、『テーゼ』の表題から豫想される所と実際の内容とのあひだのこの著しい相違を根拠にして、『遊星軌道論』の構築は、『テーゼ』の執筆の時点では、未だそれほど（又は殆んど）進捗してゐなかつたのだ、と推定することは可能なのである。——然し、この推定そのものは、恐らく正しいけれども、それは右に挙げられたのとは別の根拠に基いてさうなのである。従つてこの推定は偶然、正解に的中したにすぎない。

(3) もともと、『テーゼ』に、（候補者が当大学で講ずべく計画中の）諸講義のその概要 (Schedula Lectionum) が含まれねばならぬことは、学則の明記する所であつた。（一六〇頁参照）従つて、『テーゼ』の中に自然哲学以外の領域の命題が多数現出することは寧ろ、当然であり必然なのである。問題は、自然哲学関係の命題が『テーゼ』全体のなかでどれだけの比重を占め、どれだけの役割を果たしてゐるか、また第二に、それらが資格論文の内容とどこまで、思想的概念的に密接な関係を持つてゐるのか、といふ問題である。この両問題の分析は然し、明らかに次稿以後の領域

に属してゐる。ここでは差当り、次の如き先行理解を提示するにとどめよう。即ち、(i)『テーゼ』の全体は、体系をなすといふよりも、寧ろ諸々の領域の命題のその集積といふに近く、その内的構造は明瞭でない、従つて自然哲学関係の命題と他の命題との関係についても一義的に断定することは困難である。(ii) 自然哲学的命題が資格論文の前提をなし、後者は前者を通じて体系組織の中へ止揚されてゐる、といふ理解は、間違ひではないにしても、所謂広定義(Definitio latior)に属し、十全的(adaequata)ではない。(iii) 資格論文がこのとき同時に、現実に構築されつつあつたとすれば、その精神的鏤骨がこの程度にしか(十二命題中の一、又は精々二)、『テーゼ』の中に反映してゐないことは、多少不自然の感なきをえない。

(4) かうして、『テーゼ』の諸命題は、『テーゼ』成立の状況からしても(1)、また内容の上から見ても(2)および(3)、かなりの慌しさの中で、且つ資格論文の構築とは文脈上、相当の距離を置いて、かくある如くに定式化された、と考へられる。それらの命題は、それ故に、いはば百鍊の体系を内に縮限し結晶せしめてゐるかのやうに思ひ做さるべきではない、寧ろ、渾沌たる内面において勢力を貯へつつ、鬱勃として今こそ進路を拓き溢出しようとしてゐる何ものかの、即ち精神的生の、その理念的表現として理解されるべきなのである。そしてそのやうに理解する可能性は勿論、これらの命題をば、「幾何学的秩序」における定義か公理かのやうに、構成的原理と見做す可能性を、不可能な可能性たらしめる。然しそればかりではなく、それは、所謂「弁証法(の論理)」——たとへば、「正一反合」ないし「甲—非甲—乙」といふやうに極度に形式化され抽象化された根本図式とそれの反復とから一切を構成しようとするさういふ哲学的方法が弁証法である、と理解された場合の弁証法——に対して、吾々が真に批判的に検討しようするための・その着手点を提示する可能性でもあるであらう。

四一五 「『遊星軌道論』の理解のために」——(1) ローゼンクランツは、ヘーゲルが資格論文をまづドイツ語で書き、これをラテン語に訳出する際に三分の一ほどに圧縮した、(そのドイツ語草稿の) 執筆の時期は一八〇一年の春から

夏にかけてである、と伝へてゐる。<sup>(67)</sup>「この(ドイツ語)草稿とそれに必要だつた計算の下書きとは、まだ残つてゐる。」——たしかに、天文学や物理学に対する教養的関心は遠く高等中学時代<sup>ギムナジウム</sup>にまで溯つて見いだされる、そして『差異性』論文を執筆し始めてから公開討論が終了する(一八〇一年の遅くとも初夏から八月二十七日)までは、その一方で『遊星軌道論』のために資料を精読したり結論を摸索したりする餘裕はまづ彼になかつたであらう、またさういふ構築作業がすべて公開討論終了後にアルファから始められ七週間餘でオメガに到達した、といふことも考へにくい可能性である。従つて、『遊星軌道論』の実質が、この年の晩春ないし初夏の頃までに相当程度出来上つてゐたことは確かであらう、その仕事の着手も或ひはイエーナ以前に溯るかも知れない。

(2) しかし、それはどの程度まで進捗してゐたのだらうか。ローゼンクランツが報告しグーリガ氏が追隨してゐるやうに(注(9)参照)、ドイツ語草稿は概成してをり、これを圧縮してラテン語に訳出すればよい、といつた・樂觀しうる状況であつたのだらうか。さういふ推定に同意するためには、次の諸問題が解明されねばならない。

(i) ローゼンクランツが実際に目撃し報告してゐる所の、ドイツ語草稿および計算草稿は、現存しない。<sup>(68)</sup>従つて吾々は彼の言明を批判的に検討するための手掛りを持たないのであるが、然し、一方で吾々は、ローゼンクランツが、ヘーゲルの草稿の年代をおほむね早い方へ引寄せて見てゐたことを知つてゐる。たとへば、彼が、ヘーゲルの原初的(urspünglich)体系と見做してフランクフルト時代に帰属させてゐた或る草稿があるが、これは実は一八〇四年から五年にかけての講義草稿なのである。<sup>(69)</sup>ローゼンクランツのさういふ傾向は、亡き師はその思想的偉大さに(外からの影響を待たないで)独力で独自に到達したのでなければならぬ、といふ(「故人の友の会」とも共通の)理念に先導されて顕在化して来たものと見られるが、さういふ一般の傾向が資格論文の「ドイツ語草稿」や「計算の下書き」に接したときだけは作用しなかつた、と考へられるであらうか。しかも自然哲學的内容の草稿はすべてイエーナ来住以後にものされてゐるのであるから(ヘーゲルは明らかにイエーナに到つてはじめて、シェリングの影響のもとに、構

的、態度で、自然哲學的研究に乗りだしたのである)、『遊星軌道論』のやうな特殊、主題の論文の草稿だけがいち早く(ひよつとするとイェーナ來住以前に既に)完成してゐた、と推定するのは、どうも多少問題がありはしないか。いづれにせよ、吾々は今の所、判断を停止せざるをえない、従つてこの権威ある伝記作者の記述に対しても積極的同意は控へざるをえない。

(iii) 他方、資格論文は、初版では三十二頁あつたと報告されてゐるが、グロックナー版では正味二十七頁、総行数は八百六十九行ある。そして、既に明らかにしたやうに、ヘーゲルが論文を提出したのは、これ以上一日でも遅延すれば開講停止の処分を受けかねない・ぎりぎりの日(十月十八日)であつた。また、八月十五日に彼が第二次請願書を提出したとき、資格論文は(彼の申し立てでは)、八月末(約二週間後)には確実に大部分が(ひよつとすると全体が)完成すると見込まれるやうな段階にあつたが、あと二週間餘もあれば、といふこの感覚はそのまま公開討論の終了(八月二十七日)まで持ち越したに違ひない。従つて、『遊星軌道論』の実質が何らかの形で概成してをり、これを圧縮しラテン語に訳出する作業のみが残つてゐたのだと仮定すれば、ヘーゲルはこの時点では、日々六十ないし六十五行のラテン語作文を果たすことによつて、資格論文を完成出来る、と豫定してゐたのであらう。それが十月十八日といふやうに、印刷等に必要の時日を約十日と見込んで、なほ三倍以上の日子を費したのはどうしてであらうか。何が彼の目算を大きく狂はせたのか。

(iv) 更に、資格論文の体裁や内容のその乱雑さも問題である。——一頁足らずの序論につづき、第一章は、ニュートン力学を批判しつつ、物理学を哲学に取り戻す必要を論じて十六頁(全体、六割)にわたつてゐる。第二章は、世界の普遍的力(via communia mundi)たる重力が、物質の次元で客体化してゆく仕方を論じ、その方向で天体間の距離の比例関係を思弁的に考察する。敵役ニュートンは、七頁半のこの一章で、ふたたび、随処に登場せしめられては痛めつけられてゐる。かうして、僅か二頁足らずの第三章に到つてはじめて、太陽と各遊星との間の距離関係を理解

するための・ヘーゲルの方式が提案されるのである。従つて、この論文で実際に主題となつてゐるのは寧ろ、ニュートン力学の批判と自然哲学の眞の理念とであつて、『遊星軌道』の實質的研究は却つて附論エクスクルスであるかの如き位置附けになつてゐる。あるひは何か一層包括的な研究が突如中断ないし中止せしめられてゐるかのやうに見えなくもない。いづれにせよ、一旦概成した草稿を圧縮するといふ場合、通常は、形は圧縮以前よりも整つてくるものなのに、この論文には何か整はざる生々なまなまさが全面的に現前して来てゐるやうに思はれる。

(3) 右のやうな問題点(即ち(2)の全体)を十分に考慮したとき、吾々には、次のやうな描像が、勿論、未だ蓋然的ではあるが相当の現実性を持つた可能性として、開示されてくるであらう。——約束の原稿を發送し且つ公開討論を終へたヘーゲルは、今や餘事に煩はされることなく資格論文の完成に取りかかつた。然しやがて突如として、彼は当初は全く豫想だにしかかつた障壁に逢着し、どうにも動きがとれなくなる。それはラテン語に訳出するうへで生じた語学的技術的な問題ではなかつた。即ち、彼は、彼自身の従來の立場を問ひ直させ・これまでの発想の轉換を迫るやうな、さういふ根本的な問ひを見いだしたのである。然し根本的であればあるだけに、この問題は一朝一夕に片付くものではない、そして彼自身の焦慮をよそに提出期限は日々迫つて来る。粘り得るだけ粘つたけれども、開講権が取り消されないためには、彼は、疑問や不備や不体裁を種々残したまま、論文としての整合性が成立した所で提出にふみ切らねばならなかつた。然も、彼の眼前には早くも、『哲学評論』創刊号への寄稿期限が迫つて来てゐたのである。

(4) 従つて、この論文の根本意図は、火星と木星との間に新遊星を(算術級数の立場で)発見しようとする企ては、すべて無用無益である、とピュタゴラス学派の教論に基いて証明することであつた、といふふう若し解釈するならば、これは全く正鵠を得てゐないであらう。既に豫示されたやうに(一四二頁参照)、物理学をニュートンから引離し・復興された哲学のもとに取り戻すことが、この論文の根本意圖なのであつて、「ティティウス・ボーデの法則」

の批判は、そこから演繹される・いはば応用問題なのである、然し、さういふ根本の意図が一義的で明晰な表現に到達するには、なほ幾許かの距離があつた。つまり、彼において、理念的聯関はいまなほ實在的聯関に、あるひは阻まれあるひは繋がれて、純粹に現出しえないであつた、たとへば、心的聯関における・“求心的”と“遠心的”の兩運動の競合に制約されてゐた。いな、理念的聯関自体が、その内に相互に異質な思惟聯関を混在させた未分岐未展開の混沌なのであつた。彼の精神的生はまだまだ昏きものに囚はれてゐた、剩へ彼の実存そのものが内外から問はれてゐるのである。

それ故にこそ、吾々は資格論文を、理念的聯関そのものが其処で自由に且つ對自的に展開してゐるかのやうには、取りあげてこなかつたし、またさう取りあげるべきでもなかつたのである。その理解には、外堀を埋めてゆく辛勞が、即ち、實在的聯関の推論式を完結させる・いはば *Monchsarbeit* が、先行してゐなくてはならなかつたが、それによつてのみ、表現の奥底に、根本の意図ないし姿勢を読み取ることが可能になつたのである。さもなければ、吾々はこの晦渋且つ不恰な論文に對向するとき、最も無批判な仕方で過度の貶損ないし過剰な解釈の中にのめりこんでゆく危険に、いつも、そしていつまでも、曝されたままになつてゐたことであらう。——然し、ここまでの解釈学的批判を通じ、吾々は今や資格論文の解釈において、真に自由になり得たのではないだらうか。といふのは、この論文を理念的聯関の生まの露呈（たとへば、定義・公理……Q・E・Dの体系）であるかのやうに無批判に断定して、あるひは逐語靈感的に、あるひは逐語問責的に、攻究しようとする試みは全て斥けられてゐるからである。つまり吾々は、最早一語一語の表面に必ずしも難渋する必要はない、これを表現として、精神的生との照応の中で（軽重や強弱の諸相において）意味づけることが、吾々に可能となつてゐるのである。かの理念的聯関は寧ろ、解釈といふこの境位ではじめて對自化してくるであらう。そして解釈の端緒も既に徐々に明るみに現はれ始めてゐる。——

ニュートンの自然觀に對する反對の態度とその具體的根拠とは、この資格論文において早くも概成し、その後はず

ほど大幅に変化してゐないやうに思はれる。然しながら、そのやうに他を断罪する彼自身のその自然観ないし自然観はいかなるものであつたのか。それは実は、ニュートンの自然観に反対する姿勢だけは共通してゐても、それぞれは独自の・相互に区別されるべきい、く、つかの、自然観の、その混淆であり集合ではなかつたであらうか。そして「自然」といふひとつの概念でこれまで自分の理解して来たものが、実は相互に異質な思惟聯関の渾沌であつて、改めて問ひ直さるべき混合概念であることに気付いたとき、彼は恐らく、小遊星ケレスが発見されたことをはじめて知らされたときと同様（そしてこの両者が同一事態に属することは不可能ではない）、絶句し震撼し、苦惱低迷せざるをえなかつたであらう。（然し、十全の解決を見出す餘裕が、果してその時の彼に許されてゐたらうか。）——だが、それにしてもこの渾沌の中から（「神的自然」すらも混入してゐる集合体の内から）、いかにして「無力な自然」といふ概念が結実して来るのが出来たのか。かうした問ひが既に吾々には開示されてゐて、それが、かの理念的聯関自体に向はせる衝迫になつてゐるのである。

解釈に到る道は、ここに拓かれた。吾々はこの新任講師の資格論文を進んで手に取り、また自ら赴いて、自然哲学関係の講義を聴講して見よう。 （この項了）

#### 注 記

- 一 本稿は、ヘーゲルの所謂『イエーナ時代の論理学』を主題とした一聯の研究の、その第二章であり、前稿『論評と構築とのあひだ』（本誌第五百四十三号、一六一―七八頁、昭和五十六年）に続くものである。従つて、テキストをはじめ、略記法、転写方式などに変更はない。
- 二 主要資料——左の二文書。
- (1) Dokumente zu Hegels Jenaer Dozententätigkeit (1801-1807) : hsg. von Heinz Kimmeler. (Hegel-Studien, Bd. 4, S.21~S.99 : 1967) —— ドット Kimmeler: A をひく指示。(註語は『キツマンネル資料』)
- (2) Liste der Jenaer Schriften Hegels: hsg. von Heinz Kimmeler. (◇) derselbe: Zur Chronologie von Hegels Jenaer

Schriften, S.133~145. Hegel-Studien, Bd. 4, 1967. <ii> derselbe: Das Problem der Abgeschlossenheit des Denkens, S.313~323. 1970.) ——以下 Kimmerte: B を以て (i) を指示。(訳語は『文書年表』)

但し、本稿において、特に(1)の一部を訳出し引用する場合、多少、増補ないし注釈の附加をなさねばならなかつた。それはその訳文が、挿入される前後の文脈と諧調をなさねばならないからであるが、また資料自体の特性がそれを必要とするからでもある。即ち、資料の相当部分は、本来官公庁文書ともいふべきもので、当事者相互の理解だけを目的にしてゐたり、逆に広く適用されるやうに表現に含みを持たされたりしてをり、直訳しただけでは、徒らに模糊として、却つて混乱を招くからである。

三 (1) ヘーゲルのこの書状(第一次請願書)は、八月八日付けであるが、別人の筆跡で、「八月十三日提出」と記入されてゐる。Kimmerte: A, S.28.

(2) キムメル博士の注によると、十八世紀後半のドイツでは、Magister と Doctor とは同じ学位を指してゐた。テーゼンゲンでの Magister はイェーナでは、概ね Doctor、然し亦、屢々 Magister と呼称された。Kimmerte: A, S.28.

(3) 前稿「論評と構築とのあひだ」(『哲学研究』第五百四十三号、六六頁)。

(4) キムメル博士の『イェーナ時代の文書年表』(Kimmerte: B) から、『遊星軌道論』と、それに前後する文書とについて、文書番号、表題、通称又は内容、推定成立時期などを抽出すると、左の通りである。

15. 『差異性』論文……………一八〇一年七月末より前。
16. 資格論文に前提された『テーゼ』……………一八〇一年八月二十三日より前。
17. ブーテルヴェークの著書への書評……………一八〇一年八月二十六日か、それ以前。
18. 公開討論における挨拶のラテン語草稿……………一八〇一年八月二十七日より前。
19. 『遊星軌道論』のためのドイツ語草稿と計算草稿(現存せず)……………一八〇一年十月十八日より前。
20. 『遊星軌道論』……………一八〇一年八月二十七日以後、十月十八日より前。
21. 『論評の本質』……………一八〇一年十一月。
- (5) 即ち本稿の資料たる Kimmerte: A のみ。
- (6) Arseni Gulyga: Georg Wilhelm Friedrich Hegel. (1981)
- (7) 従つて、本稿で第一次資料ないし直接資料といふときは、最も厳密な意味でのそれ、即ちオリジナルそのもの(当然、こ



れは常にたまたまといふのである——)だけを指すのではない。複製は勿論、判読や編輯など、ある程度解釈が入った資料でも、問はれてゐる事態に關して直接の証言を含んだものでなければならず、この概念のもとに包括されてゐる。

(8) Karl Rosenkranz: *Georg Wilhelm Friedrich Hegels Leben*. (1844) bes. S. 147~159. なお同書には中樞聳氏の訳書『ヘーゲル伝』(昭和五十八年)があり、参看した。

(9) Karl Rosenkranz: a. a. O. S.151~2, A. Gulzga: a. a. O. S. 61.

(10) 渡辺祐邦氏『読解軌道論』とヘーゲルをさぐる古典力学の問題』(「哲学」《北海道大学文学部》第一冊、昭和三十九年)。同論文の第二節には、この点について、本稿と同様の見解が、別の観点から論述されてゐる。

(11) Hegel: *Sämtliche Werke*. (Hrsg. von Hermann Glockner) Bd. 1, S.20.

(12) Kimmeler: A, S.21ff.

(13) Max Wundt: *Die deutsche Schulphilosophie im Zeitalter der Aufklärung*. (1945) S.1.

(14) Gottlieb Hufeland (1760~1817). 法学者。一七八六年から一八〇三年まで、イェーナで講じた。

(15) H. E. G. Paulus (1761~1851). 神学者、また教育家。一七八九年から一八〇三年まで、イェーナで講じた。

(16) Kimmeler: A, S.23. キムメル博士は、一七九二年には、約五百人の学生が、イェーナからノーラ (Nohra) 村まで、キムメル博士の、この事件があつた。なお、一八〇一年頃の大学在籍者は約八百名であつた、といふ。

(17) Hegels *eigenhändiger Lebenslauf*: Kimmeler: B, A. Briefe, Nr. 28. M. u. M., Bd. 2, S. 582. Briefe von u. an Hegel, Bd. IV. S. 91f. (ズーフ、Briefe へ略記)

(18) Kimmeler: A, S. 49. Anm. 15. キムメル博士の報告によると、ヘーゲルは、一八〇五年六月二十八日、イェーナ大学の員外教授に就任しても、ヴェルテンブルクでの正牧師候補者たる身分が失効することのないやう、配慮を、シュトゥットガルトの宗務庁に願ひ出た。そして願ひ出た時点ではじめて、一七九三年以来支給されてゐた、年額二〇グルデンの奨学金は打ち切られたのである。

(19) Karl Rosenkranz, a. a. O., S. 142.

(20) 『ルターリン全集』(手塚富雄編)、第四卷、三二二頁。横田ち多氏訳。河出書房新社。また、同訳書三二四頁の注6を参照せられた。

(21) Kimmeler: A, S. 51. Anm. 24. 但し、ライヒスマスターレル (r.) はすべてグルデンに換算して掲げた。注の(23)を参照。

なほ、これらの数字については、現在シュンケンに御留学中の長沢邦彦氏を通じてヘーゲル・フルヒーンに照会、確認した。同氏に御礼を申しあげた。

- (22) Hartmut Buchner: Hegel und das Kritische Journal der Philosophie. S. 111~112. (Hegel-Studien, Bd. 3. 1965) 女注、前掲、三二二頁参照。
- (23) 『キトメントウ資料』の二九頁、五一頁、五九頁の各脚注を綜合する。
- (24) 1 Reichstaler (r.) = 24 Groschen (g.), 1 Species-Thaler = 1 r. 10g., 1 Laubtaler = etwa 1 r. u. 15g. である。但し、1 タルタン(Gulden)の価値はライヒェンターレのそれより一五分の〇パーセント低かったと言われる。従って 1 r. = 1.176 ~ 1.25 Gulden という等式が成立する。
- (25) それ故、本稿では、計算の便宜上、1 r. = 1.25 Gulden として、1 Species-Thaler = 1 r. 10g. = 1.25 × (1 + 10/24) = 1.771 (Gulden), 1 Laubtaler = 1 r. 15g. = 1.25 × (1 + 15/24) = 2.031 (Gulden) と計算して叙述した。
- (26) Briefe, Bd. I, S. 88~90. (Hegel an Niehammer, den 10. Dec. 1804.)
- (27) Briefe, Bd. I, S. 92~94. (Hegel an Niehammer, den 4. März 1805.)
- (28) Notizen zur Vorbereitung der Habilitationsdisputation: Kimmerle: B, Nr. 18. (Dokumente zu Hegels Entwicklung. hrsg. von Johannes Hoffmeister, S. 312~314.)
- (29) Karl Christian Friedrich Krause (1781~1832) ヲヘート、ユンクテン、ヤルテン、ヤチヤンヤン、ヒヤンケン各邦訳邦註を讀んだ。
- (30) Kimmerle: A, S. 30. Anm. 9.
- (31) Rudolf Haym: Die romantische Schule——Ein Beitrag zur Geschichte des deutschen Geistes. (1870) S. 676 f. u. Anm. d. S. 677.
- (32) Kimmerle: A, S. 35f., S. 38 Anm. 19, u. S. 41.
- (33) Kimmerle: A, S. 43. (公認理論家の、その出入を註し、邦訳をせよ、その邦訳を公認理論家の邦訳と見なすこと。)
- (34) Heinz Kimmerle: Zur Chronologie von Hegels Jenaer Schriften. S. 148. (Hegel-Studien, Bd. 4) 但し、ヘーゲルが孝則卿の、その八月二十三日の『モーゼ』の小冊子を配布したか否かについては、疑問がなすべからぬ。(一六七、八頁参照)
- (35) Hartmut Buchner: Editorischer Bericht. S. 527. (Hegel: Gesammelte Werke, Bd. 4, S. 523ff.) シュリンツは、一八

〇一年七月四日付のキムメル博士の書簡の中で、ヘーゲルを推薦し、そのフェレンスを次のやうに記している。——Dr. Hegel im Klipsteinischen Garten in Jena.

(43) Friedrich Bouterwek: Anfangsgründe der spekulativen Philosophie. Göttingen, 1800. S. 242.

(35) Briele, Bd. 4, S. 3, 30a. (Hegel an Mehmel) Briele, Bd. 1, S. 63. (Hegel an Mehmel, den 26. Aug. 1801.)

(36) Kimmeler: A, S. 38, Anm. 19. ——キムメル博士の調査結果を以下に掲げる。——開講権を与けられた講師のその序列(先任順)については、半則でははいり出した規定は何も含まれてゐなう。しかし、助教師(Adjunkte)と同時に或ひは相次いで任命されたものも、誰が先で、正助教師(Adjunctus ordinarius)の席を(その地位が空いたとき)占むうるか、とどうも問題がついて、示唆を与えるやうな条項は存する。「博士号が授与されてからの、又は助教師に任命されてからのその年数によつてはななく、その地位のための討論(Disputatio pro loco)を何時行つたかによつて、序列(先任順)が決定される。」——この規定をヘーゲルが眼中にたつてみたことはいきりしてゐる、とキムメル博士は断定する。なほ、Adjunkt といふ称号は、Magister といふ称号と同時に廃止された。

(37) Kimmeler: A, S. 40, Votum des Prof. Heinrichs. このヘンリヒ教授の言葉は、『遊星軌道論』の成立時期についての重要な証言となり得るかも知れない。

(38) Kimmeler: A, S. 41, Votum des Prof. Ilgens.

(39) Kimmeler: A, S. 41, Votum des Prof. Ulrichs.

(40) Hartmut Buchner: Editorischer Bericht S. 524. (Hegel: Gesammelte Werke, Bd. 4, S. 523ff.) ——なほ、この全集は、前稿同様、本稿のほか、Werke の附記を参照。

(41) Hegel: Werke IV: S. 190. (M.u.M., Bd. 2: S. 211~212.) 注、前稿の三七頁参照。

(42) Kimmeler: A, S. 41f. 注、第三次回章の際、イルタンおよびシュッツの両教授は共同で判断を示した。「ヘーゲル氏が約束を守つて、資格論文を討論のすべからずに届けるやう、私は断乎要求する。……」(一六四~五頁)の、「二番目の発言」しかしヘーゲルに、正教授たちのこのやうな意向が、どこまで明確に伝達されてゐたか、資料では判然としなない。(キムメル博士の注)

(43) 当時イエーナ大学で歴史学の私講師であつたシュッツ(F. K. J. Schütz)宛の、日付けのないメモがある。この人の父は、哲学部正教授として、ヘーゲルの資格試験に関はつてゐた。(Briele, Bd. 3, S. 359.) ヘーゲルは、その中で「哲学部

の非好意的態度 (Betragen der philosophischen Fakultät gegen mich) を嘆じ、自分それに打つ手がないことを、暗い絶望的な調子で述べてゐる。このメモを公刊したホフマイスターは、ヘーゲルがそこで直面してゐた問題は、資格試験の際の紛糾である、と断定してゐるが、これは寧ろ、キムメル博士のやうに、一八〇二年五月、彼が「フュヒテ的自然法思想の批判」と題する無償講義の許可を正教授会に申し出たとき、その閲着である、と見るべきであらう。(Kimmerle: B. S. 149f.) いづれにせよ、ヘーゲルは、正教授会が自分に対して、少くとも好意的でないことを、屢々感ぜざるをえず、また、それに敏感であつた。

(44) Hartmut Buchner: Hegel und das Kritische Journal der Philosophie. S. 124. (Hegel-Studien, Bd. 3. 1965)

(45) Kimmerle: A, S. 53.

(46) 資格試験全体の「迂餘曲折」が一応解明され終つたところで、事実関係を簡単に回顧しよう。

〔資格試験の事実経過〕 一八〇一年七月と十月。

- 七月……『差異性』論文脱稿。
- 八月十三日 (木) ……ヘーゲル、資格試験を出願 (第一次請願書) ↓正教授会、第一次回章と判断とを发出。
- 八月十五日 (土) ……哲学部の判断、ヘーゲルに伝達さる↓ヘーゲル、第二次請願書を提出。
- 八月十六日 (日) ……メーメル、ヘーゲルにプーテルヴェークの書評を依頼。
- 八月十七日 (月) ……哲学部正教授会、第二次回章と判断とを发出。
- 八月十八日 (火) ……哲学部の結論、ヘーゲルに伝達さる。ヘーゲル、同意。
- 八月二十日 (木) ……ヘーゲル、認定手続き完了。大学の博士名簿に記入さる。
- 八月二十一日 (金) ……哲学部、ヘーゲルの資格試験の細目に関し、第三次回章と判断とを发出。
- 八月二十三日 (日) ……『テーゼ』のパンフレット、哲学部諸教授に配布？
- 八月二十六日 (水) ……ヘーゲル、第三次請願書の提出↓哲学部、第四次回章と判断とを发出。(他方、書評原稿発送さる。)
- 八月二十七日 (木) ……『テーゼ』に基づく公開討論の実施。
- 九月十五日 (火)、十六日 (水) ……プーテルヴェークの書評、同日付けの『エルランゲン文学新聞』に掲載。
- 九月末又は十月始め……『差異性』論文、印刷を終へて、一部がシェリングの手許へ。
- 十月十八日 (日) ……『遊星軌道論』、やつと提出され、開講停止を免れる。

- 十月十九日(月)……仮講義 実施せらる。
- 十一月初旬……『哲学評論』創刊号への寄稿期限。
- (47) 前稿(『哲学研究』五四三号)の一六一〜一八頁。
- (48) Kimmeler:A, S. 41.——この言葉は、十月十八日付け・学部長あての、前任教授ヘニングス氏の書簡(前掲一六九頁)の中ど記されたやうな。
- (49) Briefe, Bd. I, S. 58~60. (Hegel an Schelling, den 2. Nov. 1800.)
- (50) 前稿「論評と構築とのちひだ」(『哲学研究』第五百四十三号)「五三頁以下、およひ六五頁以下。」
- (51) Kimmeler:A, S.69. Bericht Gahlers über Hegel. ——「何かより多くのものの中に潜んでゐるやうな人は、誰でもみな、一生に一度は、ヒェロンデリーを、これまで自分が生きてゐた世界や物質的自然と不和になる、といふ仕方です、切つぬきなければならぬ……。」ガープラーが伝へた・このクーゲルの言葉は余りにも有名である。
- (52) Kimmeler:A, S. 36. ——Laube: *Moderne Charakteristiken*. 1835.
- (53) Werke IX: S. 216~228. (Hoff, Bd. 5: S. 285~301.) ——Phänomenologie des Geistes. Vernunft: Das geistige Tierreich und der Betrug, oder die Sache selbst.
- (54) Kimmeler:A, S. 84.
- (55) 旧稿「絶対と限定——論理学をさける始元の問題」(『思想』五五五号、昭和四十五年九月)、特二一三五〜六頁。
- (56) Sören Kierkegaard: *Einübung im Christentum*. (1850) S. 58. (Übersetzt von E. Hirsch.)——訳書としては、井上良雄氏が熟識を以て訳出された『イエノスの招き——キリスト教の修練』が昭和二十八年、角川書店から刊行されてゐる。同書の八六頁参照。
- (57) Karl Rosenkranz: a. a. O., S. 29~30.
- (58) Hans-Georg Gadamer: *Wahrheit und Methode* (1960). 2. Teil, II, 1. C, S.282.
- (59) 「精神的生」といふ解釈学的概念が、勿論、認識論的概念一般と混同されてはならないが、それが認識的態度に対して持つ意味を、認識論的に定式化すると、「伝記記述を、生物の観察記録や行動記録から区別せしめつつ、可能ならしめるもの」端的には、「伝記記述のモノリオリ」といふやうに言ひ表はせよう。
- (60) Wilhelm Dilthey: *Gesammelte Schriften*, Bd. VII: *Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissen-*

- schaffen. S. 131ff., S. 142ff., u. S. 154ff.
- (61) ドイツの諸大学、特に哲学部では、教授や講師が講義のため講義室へ入場して来たとき、聴講者は歓迎の意を表はすため拳や指の背で机を軽く(十回前後)打ちつづける習いしがある。
- (62) Karl Rosenkranz: a. a. O., S. 142. —ヘーゲルが前年、一八〇〇年の秋、マインツへの小旅行をしたとき、旅券にはわらじ記載された。
- (63) Briefe, Bd. I, S. 139. (Schelver an Hegel, Ende Jan. 1807.) —前掲ガーナーの報告によると、フリースの名は尊敬を以て差付けられたのと同じく、ケーネルの名は「聖知 (Obskurität)」の感嘆詞差付けられた、と云ふ。
- (64) Kimmeler: A, S. 85. Briefe, Bd. II, S. 73. (Hegel an Frommann, 14. Apr. 1816.)
- (65) Kimmeler: A, S. 68. Rosenkranz: a. a. O., S. 216.
- (66) vgl. Hegel: Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften. (Sämtliche Werke. hrsg. Glockner, Bd. 9.) 2. Teil, Naturphilosophie: §267, Zusatz. —そこでは、落下現象に関して、次の記述がある。「一様な加速度的運動が初めて法則的な、生ける自然運動である。……力学にならなければこのことを数学的に証明して、所謂惰力を正方形で、所謂加速力をそれに加えられた三角形で表はしてある。……」(速水敏二氏訳) この補遺の資料たる聴講者ノートには、一八二一〜二二年冬学期以前に溯るものはなごが、思想的内容のば、『モーゼ』の第三命題に關聯するのではないか。次稿以後に解明した。——vgl. Rosenkranz, a. a. O., S. 158. Kimmeler: A, S. 80. Guljga, a. a. O., S. 58ff.
- (67) Karl Rosenkranz: a. a. O., S. 151~2 u. S. 154. Heinz Kimmeler: Zur Chronologie von Hegels Jenaer Schriften. S. 148. (Hegel-Studien, Bd. 4.)
- (68) Kimmeler: B, B. Texte, Nr. 19. (Hegel-Studien, Bd. 4, S. 139.)
- (69) Kimmeler: B, B. Texte, Nr. 72. vgl. Rosenkranz, a. a. O., S. 102~123.
- (70) キムメル博士の『文書年表』をシニャラー女史が、イエーナ以前のヘーゲルの文書について作成した年表と比較するべく、ほぼ明らかである。vgl. Gisela Schüleri: Zur Chronologie von Hegels Jugendschriften. S. 127~133. (Hegel-Studien, Bd. 2, 1963.)

〔附記 『遊星軌道論』の原文の通読および理解に関して、福井県立短期大学の水落健治助教授に多大の御助力をいただいた。衷心より御礼申しあげたい。〕

（筆者 さかい・おさむ 京都大学文学部〔西洋近世哲学史〕教授）

前 号 目 次

人類はなぜ人類なのか ——「未完の人類」——	江原昭善
曼荼羅の構成	清水善三
いわゆる「原型」思想について ——動物学における「比較」概念の問題——	日高敏隆
体験と形而上学 ——ジャンケレヴィッチ哲学の理解の試み	林愛子
〔報告〕バサデナの冬	平野俊二
〔書評〕下村寅太郎 『ブルクハルトの世界』	嶺秀樹

In Aristotle's "Poetics", this word is used in the meaning of *the matter which is played on the stage*.

The author analyses this meaning, and finds there a transitional sense from *action to thing*.

This investigation will contribute to the deeper understanding of Aristotelian conception of *πράγμα*.

### Hegel im Sommer 1801

—Ein Versuch, „Dokumente zu Hegels Jenaer Dozententätigkeit“ von Prof. Kimmerle zu analysieren und zu interpretieren, hinsichtlich der Habilitation Hegels—

von Osamu Sakai  
Professor des Instituts für  
Geschichte der neueren Philosophie  
an der philosophischen  
Fakultät an der Universität Kyoto

Mit diesem Aufsatz beabsichtigt der Verfasser, 1) den Habilitationsvorgang bei Hegel durch die Analyse der oben genannten Dokumente (auch mit den anderen zusammen) noch näher darzustellen, 2) daraufhin das wirkliche Profil Hegels zu schildern, das sehr entfernt von demjenigen bei Rosenkranz wäre, 3) ebendadurch die realen Bedingungen für seine Jenaer Dozententätigkeit ins klare zu bringen, um demgegenüber die rein gedanklichen Inhalte für sich herausheben zu können, dann 4) daranschließend, die Basen dieses Verfahrens selbst hermeneutisch zu erhellen.

1) In dieser Zeit war Hegel durch eine ursprüngliche „ambigüité“ oder Dunkelheit des Lebens bewogen. Z. B.: (i) Er erklärte sich vor der philo-



sophischen Fakultät, daß er in Württemberg Anwärter auf eine Pfarrstelle sei, während er andererseits nachher im Lebenslauf schrieb, daß er schon seit langem die Wissenschaft zur Bestimmung seines Lebens gemacht habe. (ii) Er erklärte auch bezüglich seiner Subsistenz, daß er einige tausend Gulden besitze, während er doch schon im Dezember 1804 Niethammer um die Aufschiebung seiner Schulden bitten mußte. (iii) Im ganzen Vorgang seiner Habilitation war er so aggressiv, daß er immer mehr die philosophische Fakultät damit ärgerte, ob er wohl sich nicht aus Hybris so verhielte. (iv) Er konnte doch beinahe nicht der Billigkeit der Fakultät entsprechen, die ihm eine große Dispensation erlaubte in Rücksicht auf den Fall Fr. Schlegels, da er aber seine Habilitationsschrift bis zum 18. Oktober nicht überreichte.

2) Wir sollten uns also Hegel nicht als solchen genialen Philosophen idealisieren, als ob er bereits ein umfangreiches Manuskript für seine Habilitation abgefasst hätte und das nur etwas zu verkürzen und ins Lateinisch hätte übersetzen müssen. Gerade mitten in dieser Abfassung mußte er vor einer großen Angst stehen, weil er zugleich durch seine Existenzfrage und sowie seine schriftstellerischen Tätigkeiten gerade stark gedrängt war, die aus seiner Zusammenarbeit mit Schelling entstanden waren. Von daher, wenn ihm dazu noch eine große, unvorausehbare Frage auf seinem eigenen Gedankengang der Habilitationsschrift zu finden ist, wie kann er denn, in solche Klemme geraten, diese Habilitationsschrift noch rechtzeitig überreichen?

3) Wir könnten also seine beide Papiere, sowohl „Habilitationsthese“ als auch „De orbitis planetarum“ nicht als die so kristallinen Ausdrücke des Gedankens ansehen, wohinter das raffinierte, durchgedachte System stände, wie „definitiones“ oder „scholia“ eines geometrisch geordneten (Systems). Wir sollten sie also (auch seine Vorlesungsmanuskripte der Jenaer Zeit)

vielmehr *verstehen* als die Ausdrücke der chaotischen Gärung des Gedankens aus jener Tiefe seines Lebens.

4) Indem wir uns in diese Richtung vertiefen und die realen Bedingungen für seine akademischen Tätigkeiten klarstellen, so können wir ja sicherlich einerseits die festen Gerüste des Verstehens für gedankliche Inhalte aufbauen. Andererseits, finden wir aber auch eine zirkulare Struktur zum Grunde unseres Verfahrens selbst von vorne herein liegen und unsern Versuch hermeneutisch je schon begründet sein. — Zum Zweck des Verstehens des Geschichtlichen-Geistigen, sollen wir uns einmal davon abkehren, um es zu erreichen; und, auch umgekehrt, sollen wir uns dazu näher kommen, um uns davon genug abstehen zu können.

## Kumārila's Theory on the Meaning of Sentence (*vākyaārtha*)

### —Preliminary Notes—

by Masaaki Hattori  
Professor of Indian Philosophy,  
Faculty of Letters,  
Kyoto University

The problem of the meaning of *śabda* (speech, language) was discussed by many schools in classical India. For the Mīmāṃsakas, who are engaged in the investigation of *dharma* (religious duties), the *śabda* with which they are primarily concerned is the injunctive sentences (*vākya*) of the Vedic texts. The philosophical study of the problems concerning the *śabda* is found in the *Mīmāṃsāsūtra* (=MS), I. 1. 6-23 and in the *Vṛttikāra-grantha* cited under the *Śābarabhāṣya* (=ŚBh), I. 1. 4-5. However, the *śabda* treated therein is either the sound (*dhvani*) or the word (*pada*), and not the sentence. It is in the MS, I. 1. 24-26 (*vākyaādhikaraṇa*) that the sentence